

ふことである。

「あめでたう」は、日本人の民族的合言葉である。従つて、正月のみの専用語ではないのであるが、正月は人間が生を幾つかに分けた其の一つ一つの年の始めであるから、年首に、特に此の壽詞を述べるのである。

然し、遠く離れた土地の人、又は事情あつて訪問出来ぬ際は、書状に代へた。これが年始状（年賀状）の始めである。

年賀状

○年始状の日附は「昭和〇〇年一月元旦」と書くのは正しい書き方ではない。元旦は一月一日の朝の意であるから意味が重複する。

○「昭和〇〇年元旦」が正しい。又は「昭和〇〇年一月一日」と書く。

○年號は入れた方が丁寧であり、受取つた方で整理するにも都合がよい。

○私製葉書、繪葉書の場合は、切手は必ず表面の左肩に正しく貼る。

### 書 初 (二月二日)

書 初

二日には、いろ／＼な事の始めをやつたものである。其の遺風は今でもある。元日には家の内の掃除をなさず、二日になつて箒を持つなど、その一例である。商家の初荷、各人の買初もそれである。讀書始も此の日に行はれたが、今でも最も普遍的に行はれて居るのは元日或は二日の書初である。書初は、用紙を延べて、めでたい文・句を書き、これを神棚の前、或は壁間に貼りさげなどする。新年の家庭行事として、まことに麗はしいことである。姿勢を正し氣を鎮め、用紙に向ひ、黒々と墨痕を揮ふことは、精神のよき修養法である。

書初の事が、記録に見えるのは鎌倉時代である。吾妻鑑に「吉書初」の語が散見する。

### 七 種 粥 (一月七日)

平安朝初期頃

正月七日の朝には、七種粥を祝ふ風習がある。これは古代の支那で、正月七日に七種の若菜を羹にした風習が移つて來たものであるが、それは平安朝初期頃とされて居る。

七種の草

七種の草は、芹、薺、御形（母子草）、はこべら（はこべ）、佛の座（おぼばこ）、すずな（蕪菜）、酒々代（大根）、を一般に擧げてある。これらは、何れも春の野に求めることの出来る七草である。これを六日の夕にとり揃へ、「七草はやす」と稱して米とぎ桶を伏せた上に俎を置き、庖丁、火箸、搗粉木、杓子、菜箸、釜蓋、火吹竹などの七つ道具を側に備へ置き、「七草なづな唐土の鳥が、日本の土地へ渡らぬ先にす」とん／＼云々と唄ひ囃し、程よく刻んだものを、翌朝の粥に入れて炊くのである。室町時代には七種が五種に減じ、更に江戸時代からは薺と蕪菜の二種となつた。唄ひ囃す文句や七つ道具には多少の異があるが、大同小異である。歌は「七草、薺、唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬ先に……」ともある。

室町時代

此の粥を食べれば、邪氣を拂ひ萬病を除くと云ひ傳へる。

唐土の鳥

唐土の鳥とは、鬼車鳥（一名姑獲）といふ妖鳥で、正月の夜空を、血の雫をたらしながら飛び廻り、其の血が子供の衣類にかゝると其の子は病むとの俗信がある。そこで此の妖鳥が近寄りぬやうにと、家々では門をしめて戸を叩き床を打つた。それが江戸時代には俎の上で叩くことになつたもので、元來は七草に關する風俗とは別のものである。

七日正月

正月七日は「七日正月」とも云つて、徳川時代には五節句の初として祝つた。若菜の節である。此の事は明治に入

保健上から見た七種粥

つて廢止せられ、民間では七種粥をつくつて祝ふ程度となつたのである。七種粥を保健上から見れば、ビタミン源であり、更に粥そのものは消化も良く、體內も温まるから、胃腸を損じがちの折、これを食べつて負擔を軽くし、胃腸を整へることは結構な食養法である。

### 鏡 開 (一月十一日)

鏡を開く

鏡餅を開いて食ふ祝儀である。武家から出たことで、男子は具足の餅を祝ひ、女子は鏡の餅を祝つた。めでたい新年であるから、切るといふ語を忌み、鏡を開くと云つたのである。その方法としては「手をもつてし、槌をもつてこれを破りかく」ので、刃物は用ゐなかつた。今でも此の遺風は存するが、實際問題として、あの固くなつた餅を刃物で切ることは容易な仕事ではない。下手をすると手を怪我しないともかぎらぬ。槌で割る方が安全であらう。

祝ひ方

祝ひ方としては、一般に汁粉餅とするが、昔の武家では鏡開の祝儀に限つて小豆は用ゐなかつた。小豆は煮えると豆の腹が切れるので、これを腹切るとして忌みきらつたといふのである。それで蕪を添へて調理したといふが、これはかぶらの一名を矢じり草といふので、蕪を添へて武運長久を願ふ心としたのである。ところが泰平になれた江戸時代には、此の風も次第に忘れられて、町家で小豆を用ゐるものがあるのにならひ、汁粉餅として祝ふ風習が出来、それが今日に及んでゐるのである。

此の祝儀は、いつ頃からか正月二十日に行はれるやうになつたが、これに就いては「二十日を祝ふ」といふ言葉の語呂が、女は「初顔祝ふ」となるので鏡の餅を祝ひ、武士は「双柄を祝ふ」で具足の餅を祝ふのだと俗に言ひ傳へられてゐる。二十日が十一日に更められたに就いては、大猷院殿(家光)承應三年正月廿日御他界あり、此の事によつ

て忌日の二十日を避けて、改めて十一日を用ゐるやうにしたとされて居る。

### 十五日粥 (一月十五日)

起りは支那

上代からの風俗

正月十五日の朝、小豆粥を祝ふ習俗がある。此の事の起りは支那に發して居る。支那では正月子の日(注)に人々は山に登つて四方を遠望し、浩然の氣を養つたものである。また元日から七日にかけては若菜を食した。共に上代からの習俗である。特に松の實を食して、松の千代の壽にあやかることが、相並んで行はれて居つた。

十五日粥の話

さて、十五日の粥の事には、こんな話がある。古代高辛氏(注)なる者の娘が、正月十五日に死んで鬼と化し、人々を悩ましたので、此の日、彼女が生前好んで食した粥を炊いて祀る。そして、人々も之を食するといふのである。更に、こんな話もある。吳縣の張成なる者が、或る夜一女神を見た。女神の曰く、我は蠶神なり、正月半に白粥を作り膏を泛べて我を祀らば、汝が蠶の産出をして百倍ならしめん、と云ふや忽ち其の姿を消した。そこで張成は粥を以て祀つたところ女神の言の如くであつた。これが十五日の粥の起りとなつた、といふのである。また、或る悪人の魂が天狗と化し身は蛇靈となつて、人を悩ましたので、其の者の命日である正月十五日、小豆粥を以て天狗を祀り、東の方に向つて再拜長跪して食すれば、年を終るまで疫氣を除くといふ話もある。

小豆粥

小豆粥には、粥柱といつて餅を入れる。また、粥を炊いた木を粥杖といひ、此の木をもつて女の尻を打てば男兒を産むとの迷信があり、また家門を叩くと厄を攘ふといふ習俗があるが、此の事に就て江馬務氏は「これ等が音響を發することでは七草囃子よりも先に行はれてゐたから、七草囃子は粥杖を打つことから模倣したのかも知れない。元來音響を發して邪厄を攘ふことは、支那古代の迷信で支那では音を以て陰氣を陽氣に易へ得ると信じてゐたのである。」

と云つて居られる。

此の十五日の粥の事を、七種の粥といつて、其の品目は延喜式に見えてゐるが、これは七草のことではなくて、七種の穀類である。此の七種の穀類の事は日本の風俗であるらしく、七日の七草の因縁を十五日に附加したものであらうと云はれる。後には七種の穀類にも轉化があつて、更に此の中の小豆だけが残つて、小豆粥の事となつたのである。

宇多天皇  
から始ま

我國では、宇多天皇の寛平頃から始まると云はれてゐる。

之を要するに、子の日の風俗は、七日の風俗に壓倒せられ、七日の風俗はまた十五日の風俗と關係を生じ、複雑な徑路を辿りながら、次第に固定した形式を備へ、やがて分離したものと解されて居る。

以前は、十四日に松飾を納めたので、かざりあげの祝とも云ひ、翌十五日の朝の小豆粥を、其の納めた跡へ供へた風習もあつた。

小豆粥は尿を利し、水腫脚氣を消すとの薬効も説かれてゐる。

### 藪 入 (一月十六日)

民間行事

雇傭關係の進歩してゐる現今では、毎月一定の公休日があるから、藪入の重要性は次第にうすれて來て居る。然し廢止されたわけではなく、民間行事として立派に現存して居る。

昔は正月と七月の各十六日が奉公人にとつては、一年に二回の最も恵まれた休息日であつた。奉公人は仕着として主家から綿入れ、繻絆、小倉の帯、足袋、履物、手拭などを與へられ、更に小遣を渡され、それに平生の貰ひ溜めを合せて所謂藪入をした。もとは正月十六日の一日だけであつたが、元祿時代から七月十六日にも藪入をさせることと

なつた。

百病を走  
らす

支那で走百病といふのは藪入のことだと云ふが、これは百病を走らすの意であるから、奉公人ならずとも、此の日は我國でも市井の老若男女が神佛に参詣し、或は郊外に遊ぶならはしであつた。藪入には先づ閻魔堂参りが付きものである。

藪入の起

起りは諸説がある。印度の佛徒の修道會明けの所謂骨休め日の事が支那に傳はり、更に我國に移つたとも云はれる。之は七月十六日の藪入の方には當て藪まらぬことはない。支那の寺参りの日に當て、正月十六日の起源を取る説もある。奴婢の宿下り日、宿入り日に名儀を取り、藪澤の多い親里へ歸る日も云はれ、藪林即ち寺へお参りして遊ぶから藪入、またやぶは彌生で草木の彌繁る如く延びくと手足をのばすからと解釋したり、養父入即ち父を養ふために親里へ孝行に歸る日など、甚だ説が多い。

考へて見れば、親里の有る者ばかりとは限らず、あつても遠路で歸れぬ者もあらうし、寺へ参らぬ者など、さまざまであるから、説の多いのが反つて、一年一度乃至は二度の藪入の眞意を語るものとも解釋してよからう。

### 骨 正 月 (一月二十日)

廿日正月

二十日は、骨正月または廿日正月といつて、尾頭つきを膳に上げせて祝ふ風習がある。お粥を炊き、團子を入れて食べる地もある。此の廿日團子を食べると、災をすゑた程の効力があるとも云はれる。

何れにしても骨正月の名のある通り、此の日は正月の残肴整理をする日である。鱈や鮭その他正月の残肴を整理して、これで正月の家庭行事も終るわけである。

サイヘヒ木

柳田國男氏の探査に據れば、九州西海岸の稍々広い區域だけには、昔ながらのサイヘヒ木（幸木）が名實ともに、古い姿を留めてゐるさうで、肥前千々岩村の橋中佐の舊居には、一丈數尺の幸木があつて、大戸のすぐ内から奥行きにつり渡され、それから十二本の繩が垂れて居る。正月が来る毎に、此の繩に海のもの山のものが下げられる。「今でも多數の働く人たちは、休みと食べ物とを引き離しては考へない。社交も人生の大事も悉く飲食によつて完成する」と云はれて更に「正月二十日を方々で骨正月、或は又木の下正月なども謂ふ理由は、この幸の木を見て居ると判つて来る。」そして此の幸の木に懸けられた食物も二十日になると、もう魚は骨ばかりになる。「始めは少しづつ裏の片面から切り取つて、成るだけ見た形を悪くせぬやうにする。さうして土地によつては後の方に、新らしい藁の莖を下げて置く所もあるが、それも皆二十日には取拂つて、そこで楽しい正月は終を告げるのである。」と述べて居られるのは古い民俗の姿がしのばれて、まことに懐しいことである。（隨筆「幸福の木に據る」）

古い民俗の姿

此の幸の木の風習は、注意して見ると、まだ方々に保存せられて居るが、土地によつて形が少し變り、また名前だけが別になつて居ると云はれる。今のうちに出来るだけ探査して記録しておきたいものである。

### 軍旗祭（一月二十三日）

軍旗の精神

軍旗は長くも 天皇陛下の親しく授け給ひ、我が建軍の本義たる 天皇御統率の精神を示し給ふところのものである。遠き昔 天皇御親征の場合、錦旗を陣頭に樹て給ひ、或は臣下に征討のことを命じさせ給ふ時は、特に錦旗節刀を賜はり、戦役中に於ける兵馬の権の一部を御委任あらせられしと同趣旨に基くものである。

明治七年に制定された

軍旗が初めて制定せられたのは、明治七年一月二十三日、近衛歩兵第一・第二の兩聯隊が編成せられた時である。

當時 明治天皇親しく日比谷操練場（現在の日比谷公園）に臨御あそばされ、優渥なる勅語と共に兩聯隊に軍旗を授與し給ひしに始まる。

御親授に方つては

「汝軍人等協力同心シテ益々威武ヲ宣揚シ以テ國家ヲ保護セヨ」

との優渥なる 勅語を賜ひ、之に對し聯隊長は

「臣等死力ヲ竭シ誓ツテ國家ヲ保護セン」

と奉答して之を拜授し、將兵は此の軍旗の下に在ること恰も 大元帥陛下の御馬前に在るの感激と信念を以て只管

天皇信仰の一念

天皇信仰の一念に燃え、愈々一死報國の心を鞏固ならしむるのである。

毎年、軍旗拜授の記念日には、各隊共盛大なる記念式典を舉行して、其の偉勳を追憶すると共に益々其の光輝を發揮せんことを誓ふのである。

尊き軍旗

今やこの尊き軍旗は、單に軍隊のみのもではなく、多年に亙り之を推戴し偉勳を積み重ねて來た在郷軍人の軍旗であり、郷黨の軍旗であり、延いては國民全體の軍旗である。恰も皇軍の武勳と名譽とが、同時に我が國民の全體の武勳と名譽たる如く、この軍旗に對する感激と崇敬とは國民全體の共に致すべきところである。これ、今日、各地に軍旗奉讀會が設けられ、軍旗祭等に當り、軍隊と共に官民が齊しく之を奉祝欣仰し奉る所以である。軍隊が軍旗を奉迎する場合、聯隊長の「捧げ銃」の命令に伴つて嘯唳と響き渡る「足曳」の喇叭の音を聞く時は、全將兵の胸はいみじくも感激におのゝくのであるが、其の「足曳」の歌詞によると

「足曳」の喇叭

あしひきの、山邊とよもす、つゝの火の、煙のうちに、いちしるく、きほへる旗は、かしこきや、わか大君の、御手つから、授けたまへるゝ御軍の、しるしの旗そ、わか輩の、軍の神そ、わかともの、軍の神と、あふきつつ、す

すめやすしめ、ますらをのとも  
とある。

○軍旗に對するときは、一般人は必ず脱帽して敬禮を爲すべきものである。

### 寒 稽 古

心身の鍛錬  
小寒から立春まで、所謂寒三十日の間、早朝または夜間の寒冷の時刻を選び、心身や音聲を練ることを寒稽古といつて居る。武道にかゝはるもの、傳統的な技藝にかゝはるものが多く行はれる。體力の練磨、技藝の修得は云ふまでもないが、寒稽古に耐へ得るためには強い克己心がなくてはかなはぬ事であるから、そこに固い信仰の念が生れ出づる。その意味に於て寒稽古は、單なる冬季練習と異なる。

武道の寒稽古  
起りは、天台宗僧徒の修行に出づと云はれる。それが鎌倉時代に入つて武士の間に寒稽古の習慣を生じたのが、引續いて武道の寒稽古としての傳統となつて居る。

### 寒 詣 り

一月には、曆に小寒と大寒とが出てゐる。小寒の入りは上旬、大寒の入りは中旬の末か下旬の初めに當つて居る。此の季節に入ると、入寒の夜から白鉢巻に白衣姿で寒行者の寒詣りが行はれる。寒中に詣るから寒詣りであるが、また行者を呼んで「かんまわり」ともいふ。

昔の裸まわりの名残として、今だに地方に其の形を存するものもある。神佛に祈願する際、冷水を以つて身を淨めることは古來からの事である。神ながらでは禊みそぎといひ、佛教の方では垢離あかぢりといふ。みそぎは身み濯そぎ、こりこりは垢あかを離れしむること、共に心身の淨めである。

### 少年の道祖神祭

長野縣小縣郡縣村に傳はる道祖神祭は獨特の奇習として一名裸祭はだかまつりとも呼ばれてゐるが、今では僅に夏目田部落にのみ残されて居る。これは小學生が、正月二日、その年の「宿やど」に當つた家に集まると、「宿」では蜜柑や其他いろ／＼の心盡しの歡待をすると共に、庭先に据風呂を沸かす。と子供達は三人宛交替で石の道祖神を抱いて湯に入り、道祖神を撫で廻し、温まると今度は折柄の寒氣も何のその、附近の小川に飛び込む。すると友達がバケツ一杯の水を頭からザアとかける。これは禊みそぎであるから非常に嚴肅に行はれるが、この禊は六日まで毎日続け、六日には一同入浴、道祖神を愛撫した後、例の禊を終ると、素ツ裸のまま約二十町もある辨天様に参拜し、此處でも小川に飛び込んでから辨天様の祠の前で默禱を捧げ、再び宿まで走つて歸り、これで此の裸祭を終るのである。こんな荒行にも拘らず、子供達は風邪一つひかず反つて丈夫になるさうである。

### 西大寺の裸まつり

岡山市に近い西大寺の裸祭は舊正月十四日夜から曉にかけて行はれる。近郷近在から群れ集ふ善男善女は、先づ吉井川に身を淨め、寒さ凌ぎの四ツ柱に力押しをして、時の經つのを待つほどに、やがて午前二時、三番太鼓

が寒天にとどろくと、堂前の廣場を埋める裸形の若者達は、ドツと本堂の御福窓の下に雪崩れ込む。本堂の灯が一斉に消されると御福窓が開かれ、老僧が現れて、奉書包みの一尺ばかりの寶木二本を群衆の頭上に投げる。その瞬間、群衆は寶木を追つて荒波のやうに搖ぎながら採り求める。寶木からは満十四日たき込められた芳香を放つので、その香ひを追つて物凄いな争奪戦が展開されるのである。この寶木を拾ひ出した者は、靈驗あらたかな御本尊から幸運を授けられるばかりでなく、寺からも金子と米俵を下されるのだといふことである。(西大寺鐵道西大寺町驛下車一軒)

寝正月

寝正月といへば、年賀も缺禮し、炬燵にもぐるか、行火にでもあつて、家内に籠る事のやうに云ふが、昔は大晦日には「歳を守る」といつて夜を徹し、東天の白む頃になつて初めて戸を閉めて、安息をしたのである。わけて家などでは、なにやかやと多忙を極めるから、歳を守る意味もあらうが事實に於いて、大晦日に寝る時間がなかつた。これで元日だけは早く寝て身體をやすめた。晝間から寝る人もあつたらうが、右の意味から、寝なくとも寝正月なのである。寝正月の寝は安息の意と解すべきであらう。

本場所大相撲

春場所と夏場所

大相撲本場所は、恒例として一月と五月の二期、先づ東京市本所の國技館に於て催される。一月場所が所謂春場所五月場所が所謂夏場所である。大日本相撲協會では、昭和十四年夏場所から、興行日數十五日制を實施した。興行日

數は始めはまち／＼であつたが、安永七年以來、晴天十日となり、明治四十二年國技館竣工開演と共に晴雨にかまはらず十日間となつた。次で大正十二年から十一日間、昭和十二年夏場所から十三日間となるなど、幾變遷があつた。昭和二年から東京本場所の他に關西本場所を年二回興行の事になり、第一回は同年三月大阪で催された。(昭和八年天龍一派が大日本關西角力協會を創立したので一時中止)次で名古屋其他で興行する。

相撲は國技  
相撲の起源

相撲は我國の特技である。外國にも相撲はあるが、其の精神及技法に於て我國のものとは異なる。今や學童の間にも相撲が奨励せられるのは體質向上と、國民精神作興上に甚だよいことである。

我國の相撲の起源は、遠く神代に之を發し、下つて垂仁天皇の御代には、御前で、大和の當麻の蹴速と出雲の野見宿禰との命がけの勝負があり、宿禰が勝を得た事は有名な話である。此の頃はすまふとは云はず「力くらべ」と云つた。聖武天皇の御代に五穀成就の御祭があり、其の節、盛大な相撲のお催しがあつた。これが相撲節會といふ公事の起りで、爾後毎年七月に行はせられ、天覽を賜ふた。専門の力士が現れたのは戰國時代の末期で、其の頃、優れた力士は所謂お抱へ力士とされて、挑戦角力が盛んに行はれた。江戸時代になると一層盛大となり、これが本場所大相撲の始めとなつて現在に及んだのである。

勤進相撲

幕府の認可を得て、勤進相撲の江戸に行はれたのは、明石志賀之助が四谷鹽町の笹寺に於て、晴天六日間演行したのを始めとすると云はれるが、別説には、上野に於て東叡山寛永寺建立のため其の地固め相撲と稱して、始めて演行するとも云はれる。此の二説に就ては、三木愛花氏に據れば、寛永元年東叡山寛永寺建立地固め相撲を以て「正しとなすものに似たり」と云はれ、四谷鹽町笹寺の演行は寛永七年であつて、寛永元年上野に演行したのち六年間中絶し同七年に至り再び笹寺に於て演行したものの如くである。(三木愛花氏「江戸幕府時代相撲沿革」に據る)

其の時、勤進方の大關は明石志賀之助、寄方の大關は仁王仁太輔、行司には吉片兵庫、松風瀬平、中立庄之助(後

の木村庄之助の中祖)が居つた。勸進方は後の東方に當るもの、寄方は後の西方に當るもので、勸進方は即ち興行主に當り、之に對して寄方は他方から集り来る力士のことである。故に江戸に於て江戸力士が興行する時は江戸力士が勸進方で、京阪方面から来るのは寄方である。之に反して京阪の興行に江戸方が行き加はる時は、京阪力士が勸進方で、江戸力士は寄方といふことになる。然し江戸若くは京阪の力士團體が、諸國を巡り興行主となる時は、其の地方の力士で來たり對するものあれば、之を寄方と稱する。

横綱の初代

横綱の初代の説には、明石志賀之助を以てするもの、谷風梶之助を以てするもの二説あるが、明石には精確な記録なく、谷風には記録が備はるを以て、此の點から谷風を推す説が有利となつて居る。

何れにせよ、明石志賀之助が江戸勸進相撲の開基たることは事實であらう。四谷鹽町の笹寺に先年「勸進相撲開基之舊蹟」と刻した碑が建てられた。

相撲、角力、角觥など書くのは「すまふ」の當字で、力士のことも亦すまふと呼ぶ。すまふはすまひの轉じたものである。

國技館の東京本場所優勝力士掲額は、明治四十二年五月以來の事で、時事新報社の寄贈になるものだつたが、東京日日新聞社と合併後は同社が之を繼承し、永く優勝力士の名譽を表彰することになつてゐる。優勝掲額は大阪國技館でも行はれて居る。

## 正月事物縁起考

縁起といふことばは、萬有みな各々の因と縁あつて起つたと見る佛教の宇宙觀に基いた術語で、梵語から出て居る。事物の始まり、事物の起り來たれる由來を述べるとの意味である。即ち神社、佛閣等の建立せられた由來また靈驗など記したものを縁起といふ。それが轉じて、將來の幸福を祈る心から、事物の起りを祝ふことを「縁起を祝ふ」といふ様になり、更に「めでたいこと」といふ意味に使はれる様になつた。然し「縁起がよい」「縁起がわるい」などといふつて兆に用ゐ、わるい方を避けて、よい方に就かうとする。この心は自然であるが、但し無智と結びつくと所謂御幣擔ぎとなる。こんなわけで、縁起といふことばは、一般に吉の方に重きを置いて用ゐられて居る。

正月が、「新しいもの」「めでたいもの」となるには、一年の收穫を了り、次の活動に入るためのくぎりとなり、従つて報本反始に心身を澄ます意があつて、茲に「新しいもの」となり、「めでたいもの」となるのである。この大切な正月即ち新年なるが故、そこに特殊の風俗が生れたもので、その風俗がまた、新しい氣を生み、めでたい心を醸し出しもするのである。そこで所謂縁起物の意味を知れば、更にめでたさが深まるわけである。以下、記するもの、地方によつて多少の異はあらうが、中庸を狙つて採り、私見を加へたものもある。

### 門松

門松を立てることは、民間に於ける最も清淨な習俗の一つである。俗に松飾と云ふが、其の飾り方には種々の形式がある。また武家では家々に式例があつて、必ずしも一樣でなかつた。然し、門松が單に新年を祝する標章の爲だけのものではなくて、神を祀る信仰に基いてゐることに變りはない。

中山太郎氏は「大昔には、正月になると年神様が民家を訪れ、その家の一年中の出來事を豫言し注意を與へ、

更に家運を祝福して廻つたもので、今に各家々で立てる門松は此の年神様が降つて来るときの依り料として設けたものである……」と解かれ、更に、千家尊有氏は「門毎に松竹を立てるのは生き生きした常緑の自然のものと連結して、各自の家を神の家にするものである。つまり各自の家を神社にすることである」と教へて居られる。起りに就いては、支那説その他、種々のものがあるが、日本では遠く古き代からある神事の櫛に發してゐるとするものが最も妥當であらう。

神代紀に「太玉命掘天香山之五百箇眞阪樹」とあつて、太古は専ら櫛を用ゐたのが中古以降に松に變じたものであらう。後世に至るも松を用ゐずして櫛を用ゐる地方があり、また櫛を用ゐる地方もある。

門松は一名立松とも云ふ。平安朝時代には、路上に幾本となく松を並べて植ゑたものであるが、此の事に就いては道路を美化し、民家の穢れを隠すための設備であるとの解釋もある。

「年のはじめのためして、終りなき代のためたさを松竹立て、門ごとに、祝ふけふこそ楽しけれ……」

と唱はれる通り、松と竹とを立てることが一般とされてゐるが、初めは松だけであつた。それが室町時代になつて竹が添へられ、江戸時代になると更に梅が加へられて、松竹梅の形が生れた。何れにしても、松の緑は常磐なる自然の表象、千歳を契る百木の長であり、祭木の略とも云はれ、竹は眞つ直ぐに生ひ延ぶるもので、本より末まで節をたがへず、緑の色を變へぬことも松と同様である。梅は霜雪を凌ぎ、寒を冒して咲き香ふもので、所謂百花の魁と云はれ、其の清香を賞して君子に比せられる。

○立て方は、外から向つて左が雄松、右が雌松である。(黒松を俗に雄松、赤松を雌松と呼ぶ。)

○一夜松を忌むから暮の三十日前に立てる事である。○存立の期間は江戸では正月十四日夕までが例であつた。また十五日までの風もあつたが、現今では東京は六日夕に取拂ふのが普通である。地方では七草の日に取拂ふ

例が多い。取除いた松の跡の穴には、小き松を挿しておく。

○門松の存立期間が即ち松の内である。

### 福壽草

初春にさきがけて花を開くから、その名も福壽に寄せて、めでたい正月の飾物としてある。異名を元日草ともいふのは、元日に咲くからといふよりは、元日を有する正月に飾るとの意に解すべきであらう。

○年頭の玄關飾として、屏風の前に福壽草の鉢をおくのを見うける。玄關の花は、裝飾でもあるが、また年賀の客に福を上げるとの意でもあるから、福壽草は適はしい飾物である。

### 若水

若水とは、元且第一番に汲む水のことである。此の水を一家の者が飲み、嗽ぎ、顔や手足をも淨める。屠蘇を祝ふ風習は支那の事から學んだのであるが、若水を飲むことは我國の古俗である。

若水は其の名の通り、これを飲んで若きに返るといふ若やぎ水から出てゐる。此の水は月神が持つてゐて、春毎に人間界に降すものとの考へがあつた。江馬務氏は若水を「これは平安朝時代の若返り法である。……立春の日、恵方の井戸の水をのむと若くなると云つてゐた。それが、後世には元且の水となり、酌人は年男と云つて血氣さかりの男に限ることになつた」と云つて居られる。江戸時代には武家の年男は麻上下で汲んだもので、これに用ゐられる若水桶は、新調のものに輪飾をかけた。今でも女性には汲ませぬ遺風がある。若水を汲む際には土地によつて種々の呪文がある。落語家が云ふ「新玉の年たち返るあしたには、若やぎ水を汲みそめにけり」と唱へて、お年玉として橙を一個、井戸の中へ投げ込むといふ話は、江戸時代のことである。「福汲め、徳汲め、寶汲め」といふ文句もある。古來、寒の水は薬と云はれるが、細菌数が少い上に、寒冷の水が口腔を通過する時に、よく口腔粘膜を緊縮せしめるものである。便通の點からも、毎朝二口三口飲むことは結構なことである。

### 櫛

さかきのご故事は、天照大御神の天の石屋戸に隠りました時、「天ノ香山の五百津眞賢木を根



掘にこじて」用ゐたことが古事記に見えてゐるから、神代、いや、それ以前からのものである。さかきは松、杉の如き常緑樹の稱で、眞榮木を意味する。榊、榮木などの文字が最も多く用ゐられるが、賢木、榮樹にも作る。神事に用ゐられるものであるから、榊を門松に用ゐる地もある。

**注連繩**

注連繩は、飾繩とも云ふ。しめは標の意である。内と外との境をつけ、穢れが内に入らぬ標識に用ゐるものであるから、特に正月だけのものではない。神殿には常に見かけるものであり、また刀鍛冶は清淨

潔齋注連を張り廻した中で一念こめて鍛へ上げ、力士の「横綱」にも其の形を見るなど、例は多い。これには、前垂注連、輪注連、牛蒡注連、大根注連、玉などの種類があるが、何れも新しい稻藁を左纏ひにしてある。左を清淨とする舊習に依るもので、端を切らないのは素直な心を示すものだと云はれる。

起りは、天照大御神が天の石屋戸から出御の時、再びお入りあそばさぬやうに藁繩を張り廻したと申す、所謂尻久米繩の故事に基くもので、すべて神事の神聖を保つ表象である。しむくめ、轉じてしめである。五穀の首である稻の藁を用ゐることは、まことに神意にかなつたことである。宮城におかせられて、正月に張られたのは延喜の頃からと見えるが、後世では民家の正月の神飾に用ゐられるやうになつた。

注連は七五三とも書く。それは卜部家の祖先が、七本、五本、三本と藁を垂らして左纏ひにしたのが始まりであるといふ。一、三、五、七、九は陽數とされるから、「七五三繩」と書くのは陽數の瑞氣を示した意にも解される。七五三の合計は十五となる。十は圓滿、五は陽の數である。共にめでたい。

○取りつけ方は、太い元の方を神棚に向つて右になるやうにつける。

○輪飾と呼ばれてゐるものは、注連繩の略されたものである。これは部屋々々に注連繩を張る煩を省いたもので

場所は何處といふ定めはない。竈、井戸、仕事場、湯殿、便所などにも懸けて清淨を祈るものである。即ち火神、水神などを年の始に祭る意である。

**蓬萊飾**

蓬萊飾は三方臺の上に、裏白、齒朶、讓葉、昆布を敷き、米を盛り、中央に橙を置き、松を立て、更に橘、蜜柑、柚、榧の實、搗栗、野老、穂俵、串柿、梅干、海老などを飾り、賀客に供して新年を祝ふもので、取肴であるが、今では御祝儀の飾物の一種となつてゐる。

これらの用品は、いづれも縁起物として、それ／＼人爲的に、めでたく意味付けられてゐるが、本來は山の幸、海の幸である。裏白は漢字で齒朶と書く。古名は母呂武吉（諸向）である。齒の字はよはひ（齡）で朶は枝で延びるものであるから、齒朶い々々々に幸福になるとか、また形が鳳凰の尾に似てゐるとか、夫婦の相生を祝する義とか、深山にあつて霜雪にも堪へる強い植物であるなど、いろ／＼に云はれる。

讓葉は、親子永く譲り傳へる即ち家系を重んじ、また世襲を大切に考へるとの心もある。

昆布は、よろこんぶとも、子生婦とも掛けて語呂が第一にめでたい。海の幸である。

米は五穀の首で富草、生命の糧である。

橙は、代々で、子孫代々の繁榮繁昌に通はせ、冬季熟して黄金色を呈するのも福壽の相である。

松は千歳の契とか千歳の齡とかの表現であり、また待つつの意にも通ふ。松は木の中の公であるとの意で、木篇に公をつけたとも云はれる。

橘は、古來より嘉祝の際に用ゐられるもので、果實の長上とせられる。

蜜柑は、橙と同じく黄金色が陽の氣であり、房の寄り合つてゐる姿も睦しく親しげである。

柚は、い・う・即ち悠で、悠々に通はせるとの解釋もある。暖地の植物だが能く寒地にも堪へる。

櫃の實から搾つた油は、延壽の効があると云はれるが、栄養分の多いことは事實である。

搗栗は、栗の實を乾燥し、白に入れ軽い杵で搗いて、穀と澁皮を除いたものである。搗と勝と訓が同じなので勝栗に通はせ、縁起物としてある。武士の出陣の祝ひには、打鮑と搗栗と昆布とを用ゐたものであるが、これは「打つて勝つて喜ぶ」との意味に通はせたものである。また凱旋の祝ひには、打鮑を鬩斗鮑にかへて出した。これは「打つて、勝つて、威を延すのを喜ぶ」の縁起である。

野老は、その長い鬚を以つて老人の長壽にあやかるといふわけで、老の字も亦めでたい意味にとつてある。山地に生ずるヤマノイモ科の多年生纏繞草本。

穂依は、岩に着生して海中にひろがつてゐる。葉の間に交つて球状の囊状物が澤山ついてゐる。また葉の脇からは草の穂のやうなものが出てゐる。前者は氣胞で、後者は實であるが、これらの形状を稻の穂と依とに見立て、めでたいものにしてある。

串柿は、澁柿の皮を剥き、竹串に刺して作られた乾柿である。柿は果實の中で第一の美味と云はれる。嘉來及び嘉喜に通じ、またかき集めの意にも掛けて、めでたくしてある。更にかはかきやきの意で、實が熟すると赤々と輝くから名付けたとも云はれる。

梅干は、赤い色が陽の色であり、皺あるは老人の長壽に因むもの、また梅干は梅寶珠で、寶珠に似た形もめでたいともされてゐる。

海老は、義を偕老同穴に取り、夫婦の長壽を祝ふにかたどつたものである。また赤きは陽の色であり、腰の曲つたところに長壽者の姿を聯想させ、更に伊勢蝦の伊勢を「威勢がよい」にも掛け、甲冑姿で勢ひよく屈みたるは將に跳ね進まんとの底力ある前進力を表示してゐるとも解するなど、正月の縁起の飾物として、缺かされぬものとなつてゐる。

のとなつてゐる。

藤澤衛彦氏は「…海の物山の物を祝ふので、これを仙聖の種として蓬萊飾と稱するのは後世の俗であらう。世俗にはまた、喰積と稱して祝ふが、春初の神供のお流を人間の上に譬喩したものか。」(「大百科事典」カザリエビ)と云つて居られる。

本意は神にある。めでたく意味付けて飾物とするといふのは、後世の禮節家などが唱へた俗説であらう。

### 飾 炭

注連飾には、橙、海老、串柿、炭その他種々のものを飾り付ける。これを總稱して飾と云ふがまた飾海老、飾炭と單獨にも呼ばれる。炭は住みで住居に必要なもの、また炭が豊かなれば寒氣を遠さけるものである。炭は土中にあつても腐蝕せぬものである。いづれにせよ、大切な火の元であるから、これを新春の祝物とするに不思議はない。

### 鏡 餅

鏡餅とは其の形状が古鏡に似てゐるところから名が出てゐる。神佛に供へ、または吉例に用ゐるものであるが、俗におかきみと云へば、正月行事の御供餅とされてゐる。江馬務氏は、「餅鏡と云つた方が正しい」と云つて居られるが、年中故事要言にも「元日に餅鏡を用ひて齒固といふなり、人は齒を以て命とする故に、齒といふ文字をヨハヒとも讀むなり。齒固は齒を固むる意なり。」と見えてゐる。もちは望で圓滿を意味するから圓い鏡に象つた餅といふことになる。本朝食鑑には「本邦古より餅を以て神明の供と爲す、而して大圓塊を作り、以て鏡形に擬す。故に餅を呼んで鏡と稱す。これ八咫鏡に擬するか。」とある。鏡餅は奈良朝時代から既にあつたが、これを正月に飾るやうになつたのは平安朝頃からかと云はれ、更に三方飾として、神佛、床の間や、具足の前、竈などに飾るやうになつたのは江戸時代からである。藤原時代には、載餅と云つて、子供の頭にのせ「あふみのや、鏡の山をたてたれば、かねてぞ見ゆる君が千とせは」の歌を唱へて、其の子供の出世を祝ふ風習が

あつた。また、武家で鏡に餅を供へることは軍神を祭る儀で、即ち鏡を神體とする心である。そこで鏡の餅とも具足の餅とも云はれる。女は鏡に供へた。それで鏡餅の名があるとも云はれるが、鏡に限らず、歳首に當つて貴重な器物に鏡餅を供へることは我國の俗禮である。鏡餅はおすはりとも云ふ。

### 屠蘇

屠蘇とは鬼氣を屠絶し、人魂を蘇生せしめるといふ語から起つてゐる。俗に、屠蘇を祝ふことによつて、舊來の邪氣を拂ひ、身を清くし、延命すると言ひ傳へる。それで、三ケ日は毎朝、一家中で屠蘇を祝ひ、年賀客にもすゝめる。

始めに就いては、唐に孫思邈といふ名醫があつて、屠蘇庵といふ小僧房を建て、世を隠れ住んで居つたが、毎年大晦日に一袋の藥を自分の生家へ送り、また附近の家毎にも配つたといふ話がある。我國に移つて來たのは平安朝の頃で、新年の御儀式の中に入れられたのは、嵯峨天皇の御代であると云はれる。

「弘仁年中より朝廷で正月三ケ日に用ひられた屠蘇は、白散、度瘴散といつた同好異曲の二種で袋は清淨の白布四角型、現今用ひられる紅色鱗型のものは故實に見當らない」(山下白水氏「屠蘇一夕話」)。赤い三角の絹袋に入れ、柳の枝(桃の枝ともいふ)に結びつけ、大晦日の晩に井戸へ吊り下げておき、元日寅の刻(午前四時)に取り上げ、酒に浸して飲むといふのは、江戸時代からのことである。井戸の中に吊り下げておくのは、かうすると地中から立ち昇る青陽の氣がしみ込むといふのである。

屠蘇藥方は、白朮、桔梗、山椒、防風、肉桂、大黃などを合はせ、三角の紅絹袋に入れ、これを銚子の中へ入れて、味醂と清酒を適當に混ぜたものを注いでおく。

飲むには、家族の中の年少の者から始め、順に飲み上げることになつてゐる。此の定法に就いては、年少の者が自分の年齢を長老に獻げて、延命長壽を願ふのだとも云はれ、家臣がお毒味してから主人に及ぶ遺風であると

も云はれる。飲む時は東方に向つてするのが古式とある。

藥には多少の異があるが、現今では屠蘇散と稱して賣つてゐる。いづれも香料藥味の類で刺激性の物質を含有して居るから、香味刺戟劑としての効能は認められるが、量を過すと反つて害となる作用の虞れが多分にある。幼児や妊婦には適しなす。

### 雑煮

三ケ日は必ず雑煮餅を祝ふ。配合する材料と拵へ方には其の地方の別と更に家例とがあるので一様でない。然し、材料は原則として其の土地に多く産するものを用ゐるから、自然そこに懐しい地方色が現はれる。輸送機關の發達と食料品種目の範圍が廣くなつた現今では、昔に比し餘程特色は薄れて來てゐるが、大別して關東流と關西流とが擧げられる。關東流、特に東京式では鬚斗餅の切つたのを焼いて用ゐる、關西流、特に大阪式では丸形小餅を用ゐる、前者は清汁仕立、後者は味噌仕立にする。但し一口に關西流と云つても、日によつて清汁仕立、味噌仕立と分け用ゐる地もあり、切餅の地もある。取合せには「昆布、打鮑、乾海鼠、牛蒡、薯蕷、栗、鯛、大根、芋子、荒布」、「日本歳時記」とあり、又「雑煮上置、串鮑、串海鼠、大根、青菜、花鰻、下盛に里芋、中に餅、また上置に串柿、勝栗、結蕨を添へるは精進仕立也」(「庖丁聞書」)とも見えてゐる。京都は特に芋頭を添へる。乾鮑、乾海鼠は古くからの賀儀用品である。尾張、伊勢地方では蛤を上置にする。昔は、正月の買ひ初に海鼠と蛤とを買ふ風習もあつたほどで、寒海鼠は特に珍重される。また海鼠は米俵に似てめでたいもの、蛤は貝殻がもとのものでないと合はないから、貞操の表象であるとしたものである。其他芹、焼豆腐、大豆、人蔘、落、竹の子、小蝦、焼鯛、焼はうばう、鶏肉、蒲鉾、鹽鱈、乾鮭、干瓢、雉子、鴨の肉、椎茸、蕪など種類が多いが、その中でも大根は最も廣く用ゐられてゐる。大根は根が太るといふ意で、めでたい野菜と云ふだけでなく餅の消化を助けるチアスターゼが含有されてゐる事を、自然のうちに體得してゐたものであらう。

鴨雑煮は、芝居道で顔見世に必ず祝ふのが定例であつた。いづれにしても雑煮の主は餅であるが、餅は福のものであるから、内裏では福生菓と呼ばれたこともあつた。雑煮を祝ふ箸は、太箸といつて太い白木の箸を用ゐる。折れることを忌むからである。清淨の意味もあらう。普通、柳を用ゐる。

雑煮は、古くはほうぞうと云つた。臟腑を保養するの意で、保藏の文字に當てゝ居る。烹雜、寶雜、寶藏とも書く。事實に於て、餅は保温器の役目をする。わけて雑煮を食ふと温まるのは、熱を體內に運び入れ且つ保つてゐる性質があるからで、即ち懷爐を腹の中に入れてゐるやうなわけ合ひのものである。

### 酒

萬事、めでたい儀式に、酒と餅は付き物である。然も酒は稷で造られ、餅は糯で造られる。共に米であることは、いかにも瑞穂の國の産物に適はしい。

さけの名は「榮え」の約つたものとか、笑み榮え楽しむなど種々に云はれる。神酒即ち神の酒とだけでも、遠く、古い時代の事までが自然と腦裡に浮び出る心地がする。神祭には無くてならぬものであり、また吉凶ともに用ゐる。酒は神代からあつた。素盞鳴尊が、八岐の大蛇を退治された時用ゐられた酒は、八鹽折の酒と云ふもので、八度手敷をかけた醇なるものであつたと云はれる。古代の酒は果實からも製し、また米を嚼んで造つたものもある。應神天皇の御世、百濟の人須々己利來朝して、始めて新たな造酒法を傳授し、茲に從來の造酒術が一變した。酒氣をおびての入浴は禁物である。注意したい。

### 大服茶

元旦、若水を沸かして茶を點じ、昆布、小梅干、勝栗、山椒などを入れた茶碗に注いで喫する風習がある。この事を、大服、王服、大福などとも書くが服を福に通はせ、普通大福茶に當てゝ居る。主人から初めて一家これを服すれば、邪氣を拂ひ、災厄を除くと云はれる。

起りに就ては、こんな話がある。村上天皇御惱の時、京都六波羅寺觀音の靈夢によつて、右の如き茶を獻じたところ、忽ち御平癒あらせられたので、これを王服と稱し毎年元旦に同寺の供茶を召さるる例となつたと云ふ。また江戸時代から起つた風習であらうとも云はれてゐるが、いづれにしても、材料には海のもの山のものが用ゐられて居る。

綠茶には、覺醒と強心と利尿の三作用がある。意識を判明にさせ、内臟器官の活動を促し、酒毒を消すのも茶の作用である。また臭氣を除く作用もあり、榮養の點ではビタミンCを含んでゐる。此の綠茶に配するに、殺菌力を有する梅干、驅毒の沃素を含む昆布などを以てすることは、衛生上からも理のあることである。更に、茶道の説く、赤誠、奉公、安分、和敬の精神は、人としての心構へであり、茶道の教ゆる、沈着、周到、簡捷、機智、綿密、秩序、順逆は、これ人としての大切な用意である。

こんな風に考へて來る時、年頭の大福茶にも少からぬ意味が生ずる。

大福茶は、昆布に梅干、それに煎つた黒大豆を加へ、綠茶を注ぐ仕方もある。

### 鯛

鯛は、形に氣品があり、色が美しい上に、めでたいに通ずるので、祝儀には必ず用ゐられる。四季を通じて捕れ、然も味に變りないのも、随時の祝物として重寶な魚である。えびす様に配してあるのも魚の王らしい品格が思はれる。鯛の體色は、櫻花の咲く頃が取り分け美しい故に、此の時分に捕れるものを櫻鯛と呼んで居る。

懸鯛とは、元日に小鯛一双を藁繩で兩喉を結んで、齒朶、護葉を挿し、籠の上に懸けることである。懸鯛の向ひ合ひは夫婦和合に象るなどと云ふ。これは六月朔日に下して羹にして食ふが、今は行ふ家が少い。

### 數の子

數の子は、鯉(餅)の子で、數の多い事に寄せて、子孫の繁殖、一族の繁榮を祝ふ心から、正月

の祝物とする。鯨は我國の海産物として最も多く捕れる魚であり、數の子は貯蔵に堪へるから、これが祝儀の食物に結びつくのは當然のことである。酒の肴にや數の子よから、親はにしん(二親)で子はあまた」といふ俚語がある。にしん和名はかどであるから、かどのことも呼ばれる。

數の子は、蛋白質に富みビタミンA Bを含み、肉體構成と發育生長に資する食品である。餅の消化をも促す作用をする。

**ごまめ**

ごまめは田作とも云ひ、武家では小殿原と祝語を用ゐて居る。魚類の王たる鯛に對していふとも、群棲の意に寄するとも云ふ。田作とは、田畑の肥料に用ゐて大いに効能あるに依つて、豊年を祝ふの意に用ゐたとも云ふ。いづれにしても、小さな海魚の乾し物である。まめは壯健で、ごまめは御壯健に掛けたのである。愚雜俎には「鯛の干たるを田作と云て田家至要のもの」とす、是をホシカと云、按ずるに干子なるべし、此ホシカ轉訛しヒシコと云、京攝にて小き鯛の鹽に漬たるをヒシコと云、東都にては小き鯛の生なるものをヒシコと云……」と見えて居る。

**芋**

ごまめは骨ともに食べられるから、石灰や燐の給源、即ち骨や齒の發育の爲には特にすぐれた食品である。雑煮に頭芋を用ゐるは、人のお頭となるに寄せたもの、里芋は子を生むの意に解してある。また「芋あがる」即ち「威も揚がる」ともする。

末つ子の箸を里芋逃げまはり (篤宗)

ゴロ／＼と育つ我子や里の芋 (弓月)

**菜**

菜を用ゐるは、「菜もあがる」即ち「名も揚がる」と、こじつけてある。序ながら「な」とは、すべて飯や酒にそへて食ふべきものの稱で、菜・魚(さかな)など、みな同じ意味である。

かるた程門の菜花の咲きにけり (一茶)

**開牛蒡**

牛蒡は、根が地中深く延びて居る故に、家の基も亦、地の底まで固くあるようにと願ふなぞ云はれて、正月の祝物に用ゐる。中身の充實したものを選ぶこと勿論である。運の開けることを祝ふから、開牛蒡の名がある。文字は牛蒡、牛房にも作る。

**開豆**

大豆の煮たものを開豆と稱して特に正月の祝物に用ゐる。まめは壯健、無事などに、まめでありと云ひ、まめな人と云へば、よく働く人の意ともなるなど縁起のよいものである。

豆は榮養價の高いもので、特に大豆は蛋白質に富み、脂肪分も多く、昔から豆腐、油揚、納豆、味噌、醤油、黄粉などに加工して居る。

**名吉**

なよしとはいなといふ魚である。いなは否に通ふとて名吉と反語を用ゐて、正月の祝物としてある。この魚は大きくなるに従つて呼名が異なる。即ち呼名を異にしつつ成長するところから、出世の魚といふ意味をもたせたものである。

**熨斗**

のしは、手伸、樂しに通ずるのも、めでたく、延長の義を取つて慶事には必ず添へられるものである。熨斗蛇の略。古く長蛇又は薄蛇と稱して、神膳にも備へた。蛇の肉を薄く延べて束ねた乾物が、それである。種類は多いが、略式には折熨斗が出来た。熨斗包の紙を折つて、中央に熨斗の小片を貼りつけたもの。更に繪熨斗と稱して折熨斗の形を刷つたもの、一層略式のもの、書熨斗で包紙の上に筆でのしと書く。由來は、古來、海の國であるから、贈物には魚類を添へる風習があり、それが轉じて魚類ならぬ品物にも、魚類の心として熨斗を添へたもので、それが今日に及んで居るのである。

○熨斗は、魚類即ちおなまぐさの意味であるから、凶事には用ゐない。また鮮魚、乾魚、鰹節、するめ、卵、肉

類などを贈る場合にも用ゐないが通例である。

**年 五** 年玉は年賜で、正月の贈物である。今日では主として子供達に贈られ、大人の間では、特に古風を重んずる家でないと行はれない。其の品目は士農工商、僧侶、神官、醫師などに依つて、それ／＼異つたものであるが、太刀、時服、裂地、引合(紙)、扇子(一對)、乾柿、酒樽(水引をかける)、山鳥、鯛、昆布、炭、蜜目も豆腐、蒟蒻、鱒、手拭など、婦女子には紅箱、子供には紙鳶、羽子板などであつたが、現今では、新しい品柑、多くなつてゐる。

○同輩以上に贈る場合には、お年玉とは書かず、御年賀、御年始など書く。

**歳 徳 棚** その年の恵方、即ち歳徳あきの方へ向けて神棚をつり、注連縄を張つて、神酒、神燈などを獻じて歳徳神を祭るのである。恵方を司どる歳徳神とは、婆娑羅龍王の娘、牛頭天王の妻、婆利塞女といふ神、即ち八將神の母などあるが、正確には知り難い。

恵方は、兄方、得方、吉方とも書くが萬事に福あり、物事を爲すに吉い方角だと説くから吉方が最も適はしい即ち吉凶の吉の方向のことである。

昔は、陰陽家が來年の支干に因つて四方の間、吉兆の方を考へ、これをあきの方と云ふ。又はえほうと云ふ。或る曆に「吉方及び凶方は各神の座する方位或は各人の星月日の相異に依り一定ならざるも、歳徳神即ち恵方はあきの方として萬に用ひて良き方位は」といふ風に書いてゐる。

陰陽道から出たことで、これを祀ること篤い家々も少くない。吉方棚とも書く。

**初夢と寶船** 初夢は古くは、節分の夜に見る夢 云つたが、それが除夜の夢となり、元日の夜の夢と變り、更に正月二日の夜の夢を初夢とするやうになつた。除夜、元日、二日と云つても、それは時間の連続であるから

見る當人には確かなことは判らぬことになる。然し節分の夜の夢を初夢としたことに就いては、節分は冬と春の季節の分れ目であるから、昔は現今よりも重要視されたもので、豆撒の行事があるのでも知られるから、これは理由のある事である。節分の夜から立春へかけての夢、即ち初夢によつて一年中の吉凶が判断せられるとしたわけである。現今で云へば除夜から元旦へかけての夢といふことにもなる。二日まで延びた事に就いては、大晦日には徹夜する家が多くなるに従つて、元日の夜は早く寝て疲れを癒やすため、熟睡の結果は夢を見ず、それで疲れも休まつて落付きの出來た二日の夜の夢といふことになつたと解される。

起りは、石橋臥波氏の二十世紀大雜書に據れば、古事談といふ書を引いて「藤原氏時代から、このやうなことが始まつて居たもののやうである」と云はれ、更に西行法師の歌に「年くれぬ春來べしとも思ひねに、まさしく見えてかなふ初夢」と詠んであるから、鎌倉時代になつてからは、確に初夢といふことが、世間一般に、もてはやされるやうになつた、とある。

初夢には吉夢もあれば凶夢もあらう。吉夢としては「一富士、二鷹、三茄子」が大關格であるが、これには説が多い。駿河國で茄子の價が暴騰した年に、高いものは富士に愛鷹山、それに茄子の價だらうと洒落を云つたのが誤傳されたと云はれ、また、「一富士、二鷹、三茄子」は諺で、其の地方の名物を並べたまでのことだとも云はれ、更に富士山は高大なもの、鷹はうちつかんで取るもの、茄子は物事を成す、即ち成就の意味に通はして吉夢の内容としたとも云はれる。

凶夢を避けて吉夢を見る禁厭としては、寶船の繪を枕の下に敷き、「なかきよの、とをのねふりの、みなめさめなみのりふねの、をとのよきかな」といふ廻文を三遍唱へることが室町將軍家からの風習と云はれる。若し凶夢の場合は、其の夢を寶船に乗せて、翌早朝に川へ流すのである。寶船の繪は、もとは船の形を描いたものを、節

分の夜、厄難を拂ふ心で水に流したのが、後世に枕の下に敷くことになった。それが江戸時代からは、寶船に珍寶を積んだ繪となつた。即ち金囊、小槌、米俵、鯛、蝦、鬘斗、隠れ蓑、笠、寶珠、鎌、鶴龜、百足、驅毒草、小松などで、遂には七福神まで乗り込ませ、「お寶、お寶」と賣り歩くまでになった。寶船の繪には、船の帆に寶といふ字を書いたもの、獏といふ字を書いたもの、獏の姿を描いたもの、獏の姿を彫刻にして軸に据ゑた有様を描いたものもある。獏は悪夢を食ふ神獸とされ、古人の想像的動物である。夢はフロイドの學説を擧げずとも、現實生活との關係深く、また健康状態、生理状態とも關係が深いものである。

獏の頭の象に似て寛かである形は仁の徳、鯛の獅子に似て俊なるは智の徳、四足の虎に似て猛なるは勇の徳を表示するとの説もある。即ち智仁勇を兼備した獏であるから、一睡の凶夢などは忽ち平けてしまふわけで、到底獏の敵ではないと云ふわけである。

寶船の古いのは京都五條天神のが第一だと、江馬務氏は云はれ、石橋臥波氏に據れば、此の風習は、以前は禁裡でも、官方でも行はれて、寶船の繪を白紙に貼つて、禁裡から官方や諸臣其他の下々の役人達に賜はつたと云ふ。また、それ／＼の家でも、板木に指つて、其の家の者達に與へたのである。

現今では廢れて居るが、年の始にあつて、初夢に一年中の吉凶を卜する習俗の生じたことは、味はつて見ると理由あることである。

**凧**

たこは、凧に巾の合字を當て凧と書き、また紙鳶にも作る。古名はイカノボリであるが、地方によつて、イカ、タコ、タツ、ハタ、タカなど名が異なる。元和頃、支那から長崎に入つたのが始まりと云はれる。古く、たこを軍中の通信や距離を計るに利用した事は、支那にも我國にも其の例がある。たこあげは、正月から晩春頃までが盛んであるが、氣象の關係で、地方によつて異なる。大凧の合戦が行事となつてゐる地方もある。東

京市では、正月上旬に、恒例の市主催凧揚げ會が行はれる。

**獨樂**

古名をこまつぶりと云ふ。こまは高麗で、古く高麗から傳來したものであらう。獨樂は種類が多い。海貝の蛇螺で作つたばい獨樂（訛つてべい獨樂）、博多獨樂、唐獨樂、ぶしやう獨樂、椎の實獨樂、源水獨樂、色かはり獨樂、地球獨樂、福當獨樂など數へ挙げれば澤山ある。構造の變つて居るのは地球獨樂で、眞鍮製の輪の中央に一本の軸を嵌め、軸の上端と下端は尖つて、輪の穴に嵌まり、自由に廻轉する。軸には更に一枚の車輪を嵌め、本輪と軸とは固定して、車輪の廻轉と共に軸も廻轉する。廻し方は軸に絲を絡ひつけて廻轉させるが盤上に直立するばかりでなく、網渡りもする。此の獨樂は學者の考案に成るものだが、明治二十年頃越前福井の吉田元氏が試に製作して、銀座街頭に販賣したのが一般に流行するに至つた始めだといふ。

獨樂廻しの名人、種々の曲藝など、獨樂の話は數多い。

**羽子つき**

羽子つきは、新春に適はしい優美にして活潑な遊びである。今日では對抗競技會が恒例の地も少くない。羽子板は天地の地の方に象つたとも、笏の名残とも、更に神功皇后の御楯に象つたとも、種々の説がある。また、鎌倉、室町の時代から、宮中には左義長といつて、正月のお飾を燃やす火祭の儀式を行はせられたが、此の左義長の儀式には鬼（疫病）を拂ふ二つのまじなひが結びついて行はれた。一つは左義長の儀式の模様を描いた三角の胡鬼板を床の間に儀式中飾ること、もう一つは左義長の火で餅を焼いて食べる習慣である。即ち羽子板は此の胡鬼板から出たもので、傳説として、こんな話がある。左義長の儀式の折に、柘植殿と呼ばれる方の娘御が、胡鬼板を火の中へ突込んで、焼けた餅を掻き寄せ、手で掴まうとすると熱かつたので、冷ますために胡鬼板でポン／＼とついた。その有様が面白かつたので、皆の者が眞似をしたのが羽子つきの形を生んだものといふのである。羽子板は古くは胡鬼板の故事でも知られる通り、單なる板片であつたのが、次第に美術的なもの

となつたのである。羽子をつく事は、蜻蛉が蚊を好んで喰ふに寄せ、羽根を蜻蛉に見立て、羽根をついて蚊をおびやかす、子供が蚊に喰はれないまじなひと云ふのが通説であるが、これに就て江馬務氏の「それならば蚊のゐる夏の遊戯にしさうなものである。私は羽子板の最も古い形から考察して、これを毬杖「手鞠」の項参照の變化したものであらうと思つてゐる。そして初めは鬼を追ふために豆を打つたものが、後に追羽子の遊戯となつたものと信じて……」と云つて居られる。昔は、女の子の羽子つきと共に、男の子には破魔弓といふものがあつた。破魔は濱で輪の意、即ち廻つて行く輪の中に矢を射込むのであるが、後には小弓で矢を射る遊戯と化した。支那から出た事であるが、此の遊びは現在は廢たれて影もない。

**かるた**

かるたは、天正年間にオランダから渡來した天正賀留多が最初のもので、數は四十八枚であつた。次に慶長の頃、これもオランダから傳ふるものと云ふウンスンかるたが入り、明和、安永頃にかけて流行したが、寛政の頃に禁止となつた。此のかるたは、うん、すん、そした、ろはい、こし、馬、花、ぐる、おふる、こつぶ、劍の繪様十一種、七十五枚で、花以下各九枚、他は五枚づゝで、それ〴〵記號によつて階級別がついてゐて、トランプの繪取りのやうにして遊ぶのである。歌かるた、源氏かるた、唐詩選かるた、伊勢かるたなど、此のウンスンかるたに倣つて作られたものである。小倉百人一首は、百人一首中最古のもので最も廣く知られて居る。

かるたは加留多、骨牌（支那）にも作る。かるたといふ三つの假名に就ては、かは勝つのか、るは負けるのる。たは總て最後に附加され決定的に用ゐられる強い語尾、との解釋もある。

東京かるた會は、明治三十七年二月、日露の風雲急を告げんとする時、紀元の佳節に日本橋の常盤木俱樂部に呱呱の聲を擧げたもので、創始者は故黒岩涙香氏であつた。平假名の標準かるたも同氏の考案に成つた。

妹を欲しと思ひぬ歌加留多 (澆石)

**雙六**

雙六は支那から朝鮮を経て傳來したものである。古い遊び方は、盤の上に白と黒の駒を置き、筒の中に入れた二個の骸子の數によつて白駒と黒駒を盤の目の順に進め、早く敵陣に入つたのを勝ちとしたものである。専ら官女たち、大宮人たちの優雅な遊びであつた。

紙雙六が現れたのは寛文の頃、佛法雙六に始まり、次いで淨土雙六、道中雙六などが出來た。繪雙六の發達したのは江戸時代に入つてからのことである。

**手鞠**

手鞠をついて遊ぶ事は、女の子の、正月遊びとして、全國的なものと云つてよい。手鞠唄の種類も多いことも知られる。東寺の唐櫃に鞠の繪が残つてゐる所から考へると、平安朝からあつたものと見ねばならない。江戸時代に入つては、手鞠をつく遊びは、いよゝ盛んとなつた。そして鞠も今日のゴムマリの如き殺風景のものではなくて、色糸で模様を繡とりなどした優美なものが現れた。今日のゴムマリに彩色したものあるは、その名残である。

蹴鞠といふこともあつたが、もう一つ古くは毬杖といふこともあつた。敵と味方との間に一線を劃し、杖で毬を打返し合ふ遊びである。奈良朝時代になると、此の杖は、形が八角形のものとなつて、握り手に繩をつけて扱ひ易いものに改められた。

鞠は毬にも作る。

**福引**

福引は、古くは兩人に餅を引き合はさせて、其の引き取つた多少によつて、一年中の禍福をうらなつたものである。即ち福を引く意である。福引には寶引と呼ばれるものもある。これは長い緒を人數だけ持つて、襖や障子の内から投げ出し、一人に一筋づゝ引き取らせる。次に其の緒に結びつけて置いた物を、銘々に



與へるのである。これは大名の邸などで行つた事だが、民家で行ふものに、おやが隠し持つた緒の一端に穴あき錢を一個つけておき、それを引き當てた者に景品を與へる仕方もある。筆者、幼少の折は越前で、これをはらうびきと呼んで居つた。寶引であらう。大名の邸で行はれた福引のさまは、西鶴も書いてゐる。今日の商家で行ふ大賣出しの福引は、右の如きものの變形である。

**萬歲**

萬歲の中心は、大和、三河、尾張、九州、加賀、越前などにある。京阪地方は大和萬歲、關東は三河萬歲で、これは江戸に出て來ると日本橋の才藏市で才藏を雇入れたものである。三河萬歲は大和萬歲の後裔と云はれる。

萬歲は、千秋萬歲の略である。天下太平、五穀成就を祈り、御代及び家族の長久延命を豫祝するものである。従つて「徳若に御代萬歲と枝も榮え、益々愛敬ありける新玉の……」云々と、めでたい文句を唱へながら舞ふのである。太夫は舞ふ者に對する敬稱であり才藏は才の男の轉訛で、太夫が嚴肅に祝辭を述べて舞ふのに對し、才藏は鼓を鳴らしながら戯れ言まじりに、俗に碎けて其の意味を説くのである。唐に萬歲樂といふ舞樂があつたが我國では踏歌の終りに「萬年阿良禮」と唱へたので、踏歌をアラレバシリ又は萬歲樂と呼ぶやうになつた。萬歲は即ち踏歌の名残と云ふ説がある。無住國師、應通禪師が萬歲の開祖との説もある。起源には説が多いが鎌倉時代に千壽萬歲法師と稱して、白衣姿の法師が祝辭を述べ歩いたといふが、それが次第に俗間に移つて今日に及んでゐるものらしい。

**獅子舞**

獅子頭を被つて狂ひ舞ふ獅子舞も、正月の御祝儀の一つである。獅子頭は唐から傳はつたもので、大神樂に行ひ、疫病除けの効があるといふので獅子の祓といふものが生じた。獅子の祓は伊勢山田に發するものである。角兵衛獅子は越後の獅子舞の事である。越後から出たので越後獅子の名がある。

越後國蒲原郡月潟村は、年々の水害で農家は疲弊が甚だしかつた。村々の幼童達は月潟村に住む東國の浪士角兵衛について、獅子頭作りと獅子舞の教へを受け、諸國を勸進して、親や家を助けたに始まるといふ傳説がある。獅子舞連中の立付袴は義經袴と呼ぶが、角兵衛兄弟が義經主従を助けた事から、其の感謝のしるしとして義經袴の着用を許したなどの話も傳はつてゐる。

**猿廻し**

猿廻しは、正月の愛嬌ある景物の一つである。猿は、厄さる、病さるなどに掛けて縁起よいものとされ、猿の舞ひを、猿舞ひ即ち「去るまい」として新家庭など好んで舞はしたものである。また、猿は馬の疫を癒すといふ俗信もあつて、正月になると猿曳が江戸に出て、武家を廻つて祓をしたものであるが、猿曳が職業化したのは室町時代からと云はれる。

ものは一長一短で、猿は「去る」に通ふといふところから客商賣の家では、猿廻しが猿を家の内に曳き入れるのを甚だ忌む風もある。

**七福神**

我國の福神は、我國固有の神、佛教系のもの、支那系のもの、以上の三系統に分けられる。これらの多くの福神は追々と淘汰整理されて蛭子命、大黒天、毘沙門天、辨財天、壽量神(壽老人)、福祿壽、布袋の七福神に集成されたのは、およそ室町期の中頃であらうと云はれる。

蛭子命は、夷子神、惠比須神、惠比壽神など記し、七福神中、唯一の日本神である。大黒天はインドの麻訶迦羅天といふ神で、これが日本に傳はつて福神に加はつたとの説と、大國主命のことであるとの説があるが、これは字音がよく似てゐる故に、佛家が合體したものといふのが妥當であらう。白鼠を其の神使とする。毘沙門天は佛法守護の神將で、四方のうち北方を守護されるといふ。甚だ勇猛果敢な神である。百足を神使とする。辨財天は七福神中、唯一の女神でインドから出て居られる。單に辨天とも稱し、天女の形に現はしてゐる。女は愛敬と

いふが其の愛敬を表顯する神である。壽量神(壽老人)は、支那から出たもので、延命長壽の神、東方朔ともいふ。福祿壽は、支那の星神とも云はれ、また福・祿・壽と、めでたい名を選び集めて一つの神名としたもので「琉球人の偽作なり」(神道問答)ともある。携ふる杖頭の經卷は壽命を記した簿冊で、鶴を配してあるのも長壽の友との意である。延命を司どる神である。布袋は、支那の神僧で無愁大量を表顯するものである。布袋を荷つてゐる故に布袋和尚と云はれるが、名は契此である。

福神踊または七福神踊と稱するものが諸國の祭禮に残つて居る。七福神全部、或は一部或は夷子と大黒とのみで舞ふこともある。主に夷子は大漁、大黒は豊作の豫祝のためであるが、田植の神事、大漁を祈る神事にも行はれることがある。

要するに七福神は、七つの福德に形を當てたもので、これを尊ぶことによつて、七難即滅、七福即生を願ふものである。

### 皇國の歌

○我が國は天照る神の末なれば日の本としもいふにぞありける  
 ○わが國はいともたふとし天地の神の祭をまつりごとにて  
 ○さしいづる此日の本の光より高麗唐土も春を知るらむ  
 ○御民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時に逢へらく思へば  
 ○今日よりは願みなくて大君の醜の御楯と出で立つわれは  
 ○青海原潮の八百重の八十國につぎて弘めよこの正道を

藤原良經  
 足代弘訓  
 本居宣長  
 海犬養岡麻呂  
 今奉部與會布  
 平田篤胤

## 二月の行事



榎原神社宮

二月一日 ○一高記念祭(東京學校行事の名物の一つ)○津浦線北進部隊、臨淮關、總舖を占領。▼人民戦線第二次檢舉廿八名(昭和十三年)○牧岡神社祭(大阪府)○鶴戸神宮祭(宮崎縣)  
 二月二日 ○久邇宮朝融王殿下御誕生(明治三十四年)○三等寢臺車を新設し、東京・神戸間の列車に連結運轉(昭和六年)○日支直通空路開通(昭和十三年)○綿製品ス・フ強制混用省令公布(昭和十三年)○二日災といつて、此の日のお災は他の日のお災より効能があるとの言ひ傳へがあります。  
 二月三日 福澤諭吉歿(明治廿四年)慶應義塾を開いた人で、時事新報を創めたのも同氏です。○芝罘占領(昭和十三年)  
 二月四日 ○大石良雄等四十六士に死を賜ふ(元祿十六年)即ち赤穂義士の命日で泉岳寺では法要を営みます。  
 二月五日 イギリスのカーライルの死んだ日(西暦一八八一年)「佛蘭西革命史」「英雄崇拜論」の著者。  
 二月六日 ○横濱正金銀行設立(明治十三年)○日露の國交斷絶(明治廿七年)  
 二月七日 ○大正天皇御大葬儀(昭和二年)○源平一の谷合戦(壽永三年)○奥村五百子歿(明治四十年)年六十三。同女史は愛國婦人會創立者。  
 二月八日 針供養の日。錆針や折針を集め、豆腐や蒟蒻にさして淡島社に納めます。裁縫に大切な針

ですから、その靈を慰め感謝の意を表すための美しい行事です。

○我が海軍驅逐隊旅順第一回夜襲（明治廿七年）

二月九日 仁川沖の海戦で我が海軍大捷（明治廿七年）露艦二隻を撃破。○長沙空襲（昭和十三年）

○皇后陛下傷兵に綑帯御下賜の御沙汰あらせらる（昭和十三年）

○菅生石部神社祭（石川縣）

二月十日 宣戦の詔勅が煥發せられました（明治廿七年）拾年前に遼東還附の詔勅を泣いて捧讀した國民は、今やロシア征討のため、死を以て國難に殉ぜん事を誓つた日です。○憲法發布五十年記念功勞者（伊藤・大隈・板垣）銅像除幕式（昭和十三年）

○四條暖神社祭（大阪府）

二月十一日 ○紀元節 此の日は建國祭を行ひ、また梅の節句のお祝ひもします。○大日本帝國憲法發布（明治廿二年）

○金鶏章創設（明治廿三年）

○文化勳章制定（昭和十二年）

○發明王エヂソン誕生（西曆一八四七年）

二月十二日 ○アメリカ大統領リンドン生る（西曆一八〇九年）

○ダーキン生る（西曆一八九九年）

○種々の起源の著者

○威海衛占領（明治廿八年）

○天津・濟南間直通列車開通（昭和十三年）

二月十三日 ○平民の姓氏を稱するを許されました。（明治八年）

○山階宮武彦王殿下御誕生（明治三十一年）

二月十四日 ○南洋ロソップ島に出張の我が日蝕觀測隊、日蝕の觀測に大成功（昭和九年）

二月十五日 ○涅槃會の式を寺々で挙げます。釋迦入滅の當日です。涅槃とは單に「死」の意味ではなく、佛教に於ける理想の境界をさすのです。○日支國際電話開通式、東京と上海で舉行

（昭和十一年）

二月十六日 ○日蓮上人誕生（貞應元年）

二月十七日 伊勢神宮に於て新年祭を行はせられ、勅使參向して幣帛を奉らせられます。神宮と同時に賢所におかせられても、新年の御親祭を行はせられます。新年祭はトシゴヒノマツリと謂みます。（二月行事同項参照）

二月十八日 ○内大臣三條實美薨す（明治廿四年）年五十五。

○重慶空襲（昭和十三年）

二月十九日 ○吉野落城（元弘三年）

○北白川宮永久王殿下御誕生（明治四十三年）

二月二十日 普通選舉法による最初の衆議院議員總選舉が行はれました（昭和三年）

○我軍、上海總攻撃（昭和七年）

二月二十一日 和氣清麿薨す（延暦十八年）

正一位を追贈せらる（明治廿一年）

○滿洲國では新年號を康德と定めました（昭和九年）

二月二十二日 爆彈三勇士忌。作江・江下・北川の三勇士が上海廟行鎮で壯烈な最期を遂げた當日（昭和七年）

東京市芝の青松寺に三勇士の銅像があります。爆彈三勇士は肉彈三勇士とも呼ばれてゐます。○聖德太子薨去（推古帝廿九年）

○ワシントン誕生（西曆一七三二年）

○アメリカ初代の大統領。

二月二十三日 敵機、臺北市外北方飛行場上空に現はれ爆彈約十箇を投下（昭和十三年）

二月二十四日 ○ヴェルダン激戦開始（大正五年）

○國際聯盟勸告案採擇、我國つひに聯盟と絶縁（昭和八年）

二月二十五日 ○菅公薨去（延喜三年）

天神祭は菅原道真公の命日に天神社で行はれる祭典。○靖國神社境内の遊藝館、館式舉行

行（明治十五年）

○南昌大空中戦

上海方面最高指揮官松井大將帝都に歸還（昭和十三年）

二月二十六日 フランス文豪ユーゴーの生れた日（西曆一八〇二年）

○内大臣齋藤實、大藏大臣高橋是清の遺難（昭和十一年）

○軍司令官朝香中將宮殿下帝都に御歸還、松井、柳川（中將）兩將軍と御共に軍狀を御奏上（昭和十三年）

二月二十七日 ○東京市に戒嚴令を公布施行（昭和十一年）

二月二十八日 ○天草の亂平定（寛永十五年）

○陸軍海軍二省設置（明治五年）

二月二十九日 ○大久保彦左衛門歿（寛永十六年）

○曆に二月二十九日の日附のある年は閏年です。そこで此の日に生れた人は四年目で誕生日がめぐつて來ることになるわけです

○戒嚴令下の帝都騒擾事件鎮定（昭和十一年）

日本魂の歌

○君のため世のため何か惜からむ捨てゝかひある命なりせば 宗良親王

○死に變り生き反りつゝ諸共に樞原の御代に復さざらめや 佐久良東雄

○御代のためいかにつくさば足りぬらむ命は物の數ならぬ身を 平野國臣

○君がため散れとをしへておのれまづ嵐にむかふ櫻井の里 野矢常方

○もののふの臣の男はかゝる世に何床の上に老はてぬべき 久坂玄瑞

○虎とみて石に立つ矢もあるものをなどか思のとほらざるべき 讀人不知

○日の本のみ軍艦のはた風にふれてくだけぬあだなみもなし 黒田清綱

○人はよしからにつくとも我が杖はやまと島根にたてむとぞ思ふ 平田篤胤

○たてそむる志だにたゆまずば龍のあぎとの玉もとるべし 大國隆正

○田にたてば小田のますらを皇軍にめさるゝ時は國のますらを 井上通泰

○上衣はさもあらばあれ敷島のやまと錦は心にぞ著る 西郷隆盛

節分 (立春の前日)

立春の前日

年内立春の古歌

節分は立春の前日である。冬季から春季に移り行かうとする季節の分れ目の日であるから、此の名がある。文字から云へば、立春・立夏・立秋・立冬に移り行く時の稱で、四季の初めの前夜にあたる。然るに立春前夜の節分を特に重視するわけは、春立つ前夜であるから年越の意味を有つてゐるのである。昔の人は、立春と正月とが同時に來ることを望んで居つたが、陰曆では望み通りにまゐらず、正月前後に來て居つた。多くは十二月に節分があつたので、「ふる年に春立ちける日よめる」古歌「年の内に春はきにけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ」(在原元方)と年内立春のことが詠まれたのである。太陽曆になつてからは、二月三日(四日)と大きく離れて、立春と正月とは一層別れてしまつた。「大阪では節分の夜を年越と唱へる、冬期の終りであるから、迎春といふ意で、斯ういひ慣したものであろう、尤も是は大阪のみに限らぬ、京畿地方は大體節分を年越とする」(渡邊霞亭氏「大阪年中行事」)。八十八夜といひ二百十日及び二百二十日といふのも、立春から八十八日目、立春から二百十日目、同じく二百二十日目をいふのである。節分の夜には豆撒きをする。熬つた大豆を柀に入れ、年徳神に供へて拜みをあげ、最初に恵方へ向つて撒き、表口に立つて撒き、次に各々の出入口、部屋々々、臺所まで撒き歩く。恵方に向つて撒くは福を迎へる意である。撒く時は聲高く「鬼は外、福は内」と唱へる。「福は内、鬼は外」と「福は内」を先に唱へたのでは、鬼は外へ出ることが出來ない。鬼は寒い北の方に居るものであるから、眞意からいへば當然北の方へも撒くべきである。鬼とは人間の爲に「悪いもの」、即ち疫病、災難、田や畠を荒すものなどを指すのである。豆を撒くことは豆を拍つと稱へる。豆打、鬼打豆と綴るのがそれである。鬼は、自分を打つ豆に、若し芽が出た時には人間界を荒してもよい、と神様から

豆を拍つ

豆撒き

自分の年齢より一粒多く

節分の由来

許しの約束が出て居るので、芽が出ては大事であるから、鬼打豆は十分に熬つたものを用ゐることになつて居る。猶煮豆は自分の年齢より一粒だけ多く紙に包み、それを以て身體をなで、背後へすてる慣はしである。更にそれを外の人に拾はせ、集めたものを辻々にすてゝ厄落しをする。小錢を添へて厄拂人に與へる事も行はれる。豆撒きの夜には多くの子供が、豆撒きを行ふ家へ押しかけて行つて豆を拾ふ風習の地もある。豆ばかりでなく菓子類も混ぜてある。元來は、鬼遣、儼遣、追儼など稱し、文武天皇の御世、五穀實らず、疫病流行した時、十二月晦日の夜、禁中殿上に於て、官人が追儼の舎人を連れて、戈で盾を三度叩き、また親王以下は挑の弓、葦の箭、桃の杖を取つて悪鬼を拂ひ追つたといふ儀式があつたと云ふから、禁中の公事であつたと考へられるが、今日では専ら民間の事である。「年内節分あるときは、禁裡煮豆を殿中に撒せられて疫鬼を逐ふ。春にあるも然り、今夜大豆を撒を拍といふ。同夜家々の門に鯛の頭首並に狗骨の條を挿む、傳へいふこの二物疫鬼の畏るゝ所なり、一家の内に事を執る者を年男といふ、高聲に鬼は外福は内と呼て、疫を穰ひ福をもとむ」(「紀事」とある。これで門口に臭氣ある鯛の頭と刺のある柀とを挿す事と、鬼(聞鼻といふ人を食ふ鬼)が、之を恐れる事は解かれたわけである。もとは支那の除疫の行事に起つて居るが、宇多天皇の御時の事として、こんな話もある。鞍馬の奥、僧正が谷、御菩提池の端(美曾路池)の方丈の穴に二頭の鬼神が住み、都へ亂入せんとするを、毘沙門の御示現によつて、此の事を別當が奏上し、主上きこしめされて御示現の仔細にまかせられ、博士をめし、方丈の穴を封じ塞がしめ、三石三斗の大豆を熬つて鬼の目を打ち潰させたまへて、災厄を免れさせたまふた、とある。豆は魔滅にも通はせる。

年男

最後に年男(歳男)の事を附記する。此の者には江戸幕府の當初から、一家の主男、家長、最年長者等が當つたが幕府では人格識見兼備の長生の武士、神社では祭祀を司る者、寺院では法力ある者、即ち權利と責任ある男子が選ばれたもので、追儼の豆打役だけでなく、總て正月の諸儀式を行ふ定役であつた。成田山では、鬼より強いものとの

意で、角力取を選んだりした。明治に入つては信仰篤く然も著名の人たる九代目團十郎が年男となつた例もある。こんな因縁もあつて、後には神社佛閣では、其の年の干支に當る人氣男を年男とする風を生じた。

鬼の出た迹掃出してあぐら哉 (一茶)

初 午 (二月初の午の日)

稲荷祭 二月に入つて初午の日に、初午と稱へて稲荷祭を行ふことは全国的の行事である。稲荷神社には、倉稻魂神、豐字氣毘賣神、保食神、御食津神などが祀られてあり、この神々は五穀の神であるから、古來農業國たる日本には何れの地にも祭祀されてあるわけである。延いては衣食の神ともしてある。

元正帝の御世 二月初の午の日と定まつた事には諸説がある。京都深草稻荷山麓鎮座の官幣大社稻荷神社(京都伏見區深草町)の祭神稲荷大神が、元明帝和銅四年二月、同社地(伊奈利山)に出現されて鎮座しました日が、恰も午の日に當つてゐた。そこで此の日が鎮座記念日となつたといふ。同社の祭神は、倉稻魂神、猿田彦命、大宮女命の三座で、攝社田中大神四大神を合せて之を稻荷五社大明神と稱する。また、元正帝の御世、偶々二月初午の日、影向あつて以來この日、祭事を營むならひとなつたとも云ふ。稲荷については、主神たる倉稻魂神鎮座の地には、もと荷田明神が祀られてあつたので、倉稻魂神の稻と荷田明神の荷とを取り合せて稻荷と呼ぶやうになつたとも、稻生、即ち稻を生産するの意とも、伊奈利山の地名に因むとも、稻刈の轉訛とも種々の解釋がある。

狐は稻荷大神の使

狐との關係は、御食津神のけつと狐のきつとが似通つて居る故に結びつけたとも云ふが、狐が稻荷大神のお使ひであるとしての傳説も存して居る。玉と鍵とを咄んだ靈狐の像を祀る事は、玉は倉稻魂神の魂に象どり、無量の福德と

表示し、鍵は五穀の倉庫を開くものであるから、稻荷大神を信仰すれば、玉と鍵、即ち福德と食とを授け給ふといふ甚だ有難いお示しの意である。

稻荷祭の御馳走

諺に江戸に多いものを「伊勢屋、稻荷に、犬の糞」とある如く、特に江戸には稻荷勧請の社が多かつた。今でも王子の稻荷をはじめ、其角の「夕立や」の句碑で知られる向島の三國、上野の花園稻荷その他、名高い稻荷神社が澤山存して居る。稻荷祭の御馳走は赤飯、油揚、焼豆腐、菜の芥子和へ、芋、蒟蒻、刻みするめ等であるが、地口行燈も此の日の景物として見逃がせぬものである。人が梅を見てゐる畫に「うめ見りやきりがない」(上見りやきりがない)「葛西金町半田のいなり」(傘へ穴あき半出のいなり)など江戸ツ子らしい輕妙さである。地口行燈には傘をさしたものがあつた。これは昔の、日本橋の稻荷祭の時、俄雨が降り出したので、越後屋(今の三越)の番傘を行燈へさしたのが起りだと、青木泰介氏筆「十二月事物小考」に見えて居る。また江戸の頃は、此の日に子供を手習讀書の師匠へ入門させる風習もあつた。「いの字より習ひそめてや稻荷山」(其角)といふ句もある。

初午や物種賣に日のあたる 蕪村

針 供 養 (二月八日)

針供養の行事

二月八日は針供養と稱して、女は糸針の業を休み、またお針友達の女の子の骨休めの日とする習俗がある。現代の學校に於ても、裁縫室で此の催しをするも望ましいことである。そして一年中の折針を集めて豆腐にさし、淡島社に納める。「針供養」と題する故岡本かの子氏の一文は、此の行事の精神をよく汲んで居られるから記す。

「こどもの時分に祖母が淡島さまの針供養へお詣りに連れて行つて呉れた。この日は兼て一家中の女の使つた針の折

れを集めて置いたものを携へて行つて納めるのである。境内には針の無名戦士の墓が出来てゐる。調べて見ると丁度この月(二月)の八日であつた。寒いので祖母はお高祖母巾を冠つて出かけた。お宮は淡島神社であつた。家族の寒からぬやう着物を縫ふときには主婦がいのちの武器と頼む針である。良人の歸りを待ち侘びる火影の下の妻には慰めの友ともなる針、一つ身の背丈けを縫ひ伸ばす母には愛の指先ともなる針。はつ針の意氣込み、仕立て上げたとち針のうれしさ。女ごころは針に徹るまで染む。さういふ器類をたとへ折れ傷きて不用となるとも、むさ／＼捨て放つは悼ましい氣がするのが日本女性の常である。またそこには勤勞を助けたものは器類たりとて感謝の意を表する日本女性の感情の折目正しさも現れてゐる。また散逸しては危ない折れ針を一所に蒐める工夫もこの催しには混つてゐるかも知れない。今日でも仕立職の店では一日を休んで供養の意を表するところもあると聞いた。一本の針に現れた情操の肌理のこまかさ、集まれば國の緻密性となり、同胞愛の粘りとなる。」と。

まことに至れり盡せりの筆で、解説を必要としない。感謝の心、物資愛護の實益、此の兩様からしても保有したい行事の一つである。

### 日本精神發揚週間 (二月五日—十一日)

昭和十四年の紀元節を迎へた時に、政府では二月五日から二月十一日の一週間を日本精神發揚週間と定め、神武天皇の御創業を偲び奉り八紘一字の精神の闡明を中心として、わが尊嚴なる國體、宏遠なる肇國の理想、日本文化の發揚に努め東亞新秩序の建設に邁進すべき國民の覺悟を固からしめた。

實施方法

實 施 方 法

#### (一) 紀元節奉祝

(イ) 當日午前九時に「國民奉祝の時間」を設定し、各家庭その他の場所で、それ／＼宮城遙拜を行ふこと。このためラヂオは同時刻に「國民奉祝の時間」の放送を行ふこと。

(ロ) 官廳、學校等で奉拜式又は祝賀式を行ふに當つては、週間の趣旨の徹底を圖ること。

(ハ) 市區町村に在つては、なるべく市區町村民のため、神社・學校・公會堂等適當の場所に於て祝賀の方法を講じ週間趣旨の徹底を圖ること。各種團體・會社・銀行・工場等でも右に準じ成るべく式を舉行すること。

(ニ) 八紘一字の精神の闡明、日本文化の發揚、東亞新秩序等に關する講演會・座談會等を開催すること。

(三) 國體の闡明、國史の顯揚、東亞の新事態に對する認識強化等に資するため、展覽會・映寫會等を開催すること。

(四) 家庭に於ける敬神崇祖の行事を實踐すること。

(五) 剛健なる精神を涵養するため集團的勤勞奉仕作業・團體行進・武道大會等を実施すること。

### 紀 元 節 (二月十一日)

神武天皇御即位式御舉行の日を選びて紀元と申すいはれは、天孫天降りよりにては何々萬年を経たることか餘りにも長き年數なるが故に、歴史上の記憶の揃つてまゐつた 神武天皇の御奠都御即位式の日を取つて、年數計算の基準となしたもので、皇位は天孫天降りの時、 皇祖の御神勅により始まつて居るのである。

紀元節當日、宮中に在りては、大祭として皇靈殿に於て御親祭の儀が行はせられる。其の次第を承るに、午前八時、皇靈殿を御裝飾し奉り、奏樂裡に御開扉、神饌幣帛を供へ奉る。 天皇陛下には綾綺殿にて御束帯に御召替あり、

御手水の後、十時出御、皇靈殿に進ませられ御内陣に入つて御拜あり御告文を奏し給はる。畢つて、皇后陛下、皇太子殿下の御拜があり、皇族方の拜禮、宮内官吏、高等官、奏任官の拜禮あつて、朝の祭典を終る。午後五時より更に夕の御祭典を行はせられ、天皇陛下の御拜あり、御退出後、御神樂を奏す。式部職雅樂部の樂師、階下に進めば掌典は櫛を執つて神樂人の長に授く。之を受けて舞樂の後、神樂人の長は櫛を掌典に渡す。掌典これを受けて女官に渡せば受けて之を御靈に獻上す。其の後、神饌幣帛を撤し、奏樂裡に御閉扉となるとの次第である。

此の日、宮中にては群臣の参賀を受け給ひ、皇族及び大臣以下文武高官、外國使臣を豐明殿に召して、饗宴を催される。御宴中殿前に於て久米舞が演奏される。

橿原神宮にても大祭として勅使参向あり、伊勢神宮その他、官・國幣社以下にては中祭として奉仕される。

○

文學博士宮地直一氏は「神武天皇の御聖業」と題する文中に、次の如く述べて居られる。

「天皇は大和の橿原宮に即位遊ばさるゝに先立ち、九州の南方日向國の高千穂宮にましまして長い歳月を經過せられ、御歳四十五歳に至り初めて日向國を御進發になり、六年餘の日數を道中に費された後、初めて辛酉（辛酉）の年元旦のめでたい御即位式となつたと記されて居り、其間に於ける色々な御事蹟は、委しく日本書紀、古事記等の古典に記載せられてゐる如くであります。是等は何れも天皇の御創業に就いて如何に深い準備的工事が爲されたか、換言すれば御即位と云ふ輝やかしい結果を産出するに至るまでの直接の御仕事と申さねばならぬと思ふのであります。併し天皇の赫々たる御聖業は、何も天皇の御代に至つて初めて其の原因が出来たのではなく、更に溯つて悠遠の昔にその發端が萌し、之が大本を根抵づけられてゐるのであります。」（紀元二千六百年「第二卷第三號」）

神武天皇  
御年四十  
五歳

悠遠の昔  
本からの大

### 皇紀二千六百年の紀元の佳節を迎へて（講話資料）

肇國の大  
精神

本日、紀元二千六百年の紀元の佳節を迎へ、神武天皇の御創業を偲び奉り、肇國の大精神を新にすることは、まことに意義深いこととあります。

八紘一字  
の大精神

神武天皇は、神代より承けつがれた天業を恢弘し、限りなき困難を克服して、御東征の大業を完成され、搖ぎなき皇位に即かせられました。天皇が大和橿原の地に都を定め給ふに當つて、下し賜つた詔の中にある「八紘ヲ掩ヒテ宇ト爲ム」といふ大精神は實に脈々としてわが三千年の國史を貫いて流れる大精神であります。「八紘一字」とは、皇化にまつらはぬ一切の禍を拂ひ、日本は勿論のこと、我國家我民族は自存しつゝも、相倚り相扶けて全體として磊然たる一家をなし、以て生成發展してやまないといふ意味に外ならないのであります。

支那事變  
と日本精  
神  
新東亞の  
建設

この大精神は又、今回の支那事變に於て最高度に發揮されなければならぬところのものであります。支那四億の民衆を、抗日容共の悪夢から解放し、共存共榮の東亞の新秩序を建設する爲に我々は如何なる努力をも惜んではなりません。この爲に皇軍將兵はあらゆる苦難を忍んで曠古の大捷利を博し、蔣政權をして一地方政權に轉落せしめてしまつたのであります。

大陸への  
大發展

しかし乍ら、其の後に來る建設こそ、更に大なる努力を要求するものであります。一地方政權に轉落したとは云へ、尙ほソ聯その他の援助をたのんで執拗な抵抗をつづける蔣政權を抑へると共に、わが國土の二倍に剩る占領地の治安を維持し、その豊富なる資源をわが優秀なる技術と資本を以て開發し、更に傳統の香り高い東洋文化に發展せしめなければならぬ、まさに「八紘一字」の御旗の下、國民精神の一段の發揚を要する秋であります。

二千六百年の紀元節を迎へ、一層その感を強うする次第であります。

### 建 國 祭 (二月十一日)

日本建國の理想

建國祭は、日本建國の理想に基き高明なる國民精神を發揚し、紀元節奉祝と共に、全國民の精神總動員を爲さんとする行事である。わけて皇紀二千六百年を迎へての建國祭は、特に意義深きものがある。

第一回の建國祭

起りは、大正十四年十一月永田秀次郎氏を準備委員長に、丸山鶴吉氏を副委員長に擧げ、石光眞臣、平沼騏一郎、八代六郎氏等二百六十六名を準備委員として其の議を進め、陣容整備するに及んで、翌大正十五年二月十一日の紀元節を期して第一回の建國祭を舉行するに至つたものである。

高明なる建國の理想

建國祭宣言書 悠々たる哉建國、遠く有史以前の神話に出でて天地開闢の古に遡る。高明なる哉我建國の理想、平和と光明とを表現する天照大御神を天祖とし、明和と仁愛と勇武とを象徴する三種の神器を奉じ、皇統連綿、君幹臣枝、億兆心を一にして、世々その美を濟し、天壤と共に窮まる所なし。萬機公論に決するの宏謨、君民同治、四民平等の大義、總て皆帝國肇造の當初より定まる所、王道蕩々八紘を光被し、之を中外に施して悖らざるもの、是我等が最も透徹せる理解を以て我建國の精神を讚美する所以なり。然りと雖も四時は代謝し世態は變遷す。我建國の精神を明徴にして之を永遠に遵行して謬なからしむるには須らく古今に究通し、時代に適應せしむるの用意を要す。金甌無缺の國史は偶然にあらず、是れ皆我等祖先が忠實勇武國を愛し、公に殉ひ、時勢を洞察して其宜しきを制したるに由る。儒教、佛教、耶蘇教の傳來に對する態度の如き、元寇の役に於ける舉國一致の如き、大化の新政、明治維新の英斷の如き、何れも皆我等祖先が克く大業を獎勵し、達議果敢、斷じて之を行ひし努力の結果にあらざるはなし。今や帝國内外多事、我等の責務洵に重大なり。右傾を警しめ左傾を制し、中正堂々建國の精神に更

祖先の努力の結果

生し、以て時代の病弊を一掃せむ事を期せざるべからず。

惟ふに世界大戰に於ける各國民の残忍と憎惡とは、泰西文明に對する我等の敬意を抛擲せしめたり。今や歐洲の天地は小邦分立して安定する所なく、人心恟として、内は貧富の鬭争に苦み、外は獨立の維持に汲々たり。露國の共產思想、伊國の國粹運動、英米の民主政治、總て皆其國特殊の事情と國民性に依るもの、單に他山の石たらしむべくして毫も則るに足らざるなり。我等は我等の脚に依りて歩まざるべからず。模倣は自殺なり、自ら濟ふの所以にあらず。況や其短所缺點のみを模倣するに於てをや。我を助くる者は我なり、他にあらざるなり。我等の進むべき大道は唯建國の古に復りて之を現代化するにあり。紀元節は實に神武恢弘の偉蹟を回顧すべき我國特有の大祀なり。之をして單に形式の一祝日たらしむべからず。而して我國民の腦裏に建國の大精神を反省せしむるには紀元節より適切なるは無し。最も古き此大精神をして年と共に新ならしむるは、實に我々が之を祖先に應へ之を子孫に傳ふる所以の職分なり。我等は此の如き確信の上に立ちて茲に建國祭の舉行を提唱す。願くば全國民諸君の賛同を得て我高明なる建國の大精神をして益々其光輝を發揚せむことを。

紀元二千五百八十五年十二月七日

#### 式 辭

茲ニ皇紀二千五百九十七年ノ紀元節ヲ迎ヘ國ヲ擧ケテ建國祭ノ式典ヲ行ヒ我カ建國ノ理想ニ基キ高明ナル國民精神ヲ發揚シ建國ノ鴻業ヲ鑽仰シ紀元ノ佳節ヲ奉祝スルハ意義洵ニ深キヲ思ヒ感激ニ堪ヘヌ次第デアリマス  
謹ミテ惟フニ 神武天皇ノ橿原ノ宮ニ御即位遊ハサレテヨリ皇統連綿トシテ天壤ト共ニ窮リナク内ハ世界ニ比類ヲ見サル文化ヲ建設シ外ハ正義ヲ擁護シテ皇威ヲ八紘ニ輝カスニ至リマシタコトハ偏ニ天祖神勅ノ顯現ト申上クヘキ 御歴代天皇ノ御稜威ニ由ルモノテアツテ國民ノ齊シク歡喜措ク能ハサル所デアリマス

建 國 祭

神武恢弘の偉蹟



思フニ隣邦滿洲國ニ對スル啓發誘掖ト謂ヒ日獨防共協定ノ締結ト謂ヒ其ノ他我國ノ對外行動ハ孰レモ崇高正大ナル道義的意義ヲ有スルモノニシテ我カ建國ノ大精神ノ發露ニ外ナラヌヲテアリマス然ルニ列國中ニハ尙未タ我カ國ノ公正ナル眞意ヲ諒解セサルモノアリ國際情勢ハ一日ノ儉安ヲ許サス一方國內ニ於テハ國民精神ノ作興ニ庶政ノ革新ニ淳風美俗ノ更張ニ幾多國民ノ猛省ヲ要スル問題カ山積シテ居ルノテアリマス

斯ル内外ノ時局ニ直面シテ我等國民ハ深く思ヒ遠ク慮リ正義仁愛勇武ノ心ヲ持シテ一致團結シ以テ國力ヲ充實シ國威ノ伸張ヲ圖フナケレハナラヌコトヲ痛感スル次第テアリマス我カ建國祭ハ歳ヲ累ヌルニ從ヒテ益々盛大ニ赴キ今ヤ國民的一大祝典タルニ至リマシタコトハ磅礴タル建國精神ノ發露テアツテ諸君ト共ニ誠ニ欣快ニ堪ヘサル所デアリマス

茲ニ我等ハ謹ミテ大日本帝國ノ彌榮ヲ祈念シ本日ノ式典ヲシテ大イニ意義アラシメタイト希フモノデアリマス

宣 誓

皇紀二千五百九十七年ノ建國祭ニ當リ謹ミテ肇國ノ宏護ト列聖ノ遺訓トニ恪遵シ天業翼贊ノ赤誠ヲ披瀝シ以テ皇道ヲ六合ニ恢弘センコトヲ天地神明ニ誓ヒ奉ル

梅の節句

家庭中心の奉祝日

更に、馥郁あたりを拂ふ梅花の心に因み建國祭當日を梅の節句と稱し、家庭中心の奉祝日たらしめんとこの運動が起つたのは昭和六年からの事である。家庭での奉祝方法としては、神棚を淨めて辯を飾り、供物をして拜禮更に朝詣をなすこと、建國に適はしい人形を飾り、七夕行事のやうに建國に因む文字を短冊などに書き庭樹にかけること、子供は建國かるた遊びをなし、建國料理（赤飯、甘酒、季節の果物）建國園子（小豆搗入園子）を祝ふのも結構である。

三笠山の山燒

遠く寶曆の昔に始まるといふ早春奈良の行事、三笠山の山燒は毎年紀元節の夕刻から行はれる。合圖の喇叭が鳴ると三段の山の芝生に火をつける。見るみるうちに火は龍と躍つて山頂さして燃えあがつて行く。この間に花火師の仕掛花火が絶え間なく打ち上げられ、壯觀極まりない火の空、火の山を描き出す。それは、あたかも黒い闇と、美しい火との二色で描かれた動く繪そのものである。（關西線奈良驛から二軒六）

二月は梅見月

梅 見 二月の異名を梅見月ともいふ。梅の名所を尋ねて、梅花を賞する風は古くからあつた事で、風雅の士の心からの喜びであつた。今でも梅林に遊ぶ人は少くない。梅見は探梅、觀梅とも稱する。

梅は薔薇科に屬する落葉喬木で、春に先だつて花を開くが、東京地方では、太陽曆の二月では未だ花には早すぎる。昨年（昭和十三年）老生が試みに探つて見ると、二月四日の芝公園は蕾かたく、二月十九日の久地は蕾やふくらみ、三月二日の蒲田梅屋敷は蕾や破るの程度であつた。

梅の故事

梅の故事は多い。桓武天皇平安遷都の初めに、紫宸殿の前に梅樹を植ゑられたとも、村上天皇の御代に、清涼殿の前の梅樹が枯れたので、代り木を索められた所、紅梅の匂ひけはしきを得られた。その折、梅の主は「勅なればいともかしこし鶯の宿はとはばいかにこたへむ」と詠じたともある。柿本人麿の歌、紀貫之の歌なども人の知るところである。菅公の事は云ふまでもなく、箴に梅を挿んで勇名を馳せた梶原景季の話など枚擧に遑なしである。實地踏査として知られる岡山鳥編「江戸名所花曆」にも梅の名所が數々記載されて居り、殊に江戸泰平の代には梅見は盛んであつたものらしい。

梅の名所は鐵道省その他、各種機關が宣傳して居るから擧げるまでもあるまい。

○春もやや景色ととのふ月と梅 (芭蕉)  
○梅一りんりんほどのあたゝかさ (嵐雪)

### 帝國憲法發布記念日 (二月十一日)

明治二十二年の本日、天皇陛下は、大日本帝國憲法を御發布あそばされて、立憲政體の基を建てさせられたのである。

憲法發布  
の大典

憲法發布の大典は、新皇居の正殿で舉げさせられたのである。

#### 憲法發布の勅語

現在及將  
來ノ臣民  
ニ宣布ス

朕國家ノ隆昌ト慶福トヲ以テ中心ノ欣榮トシ朕カ祖宗ニ承クルノ大權ニ依リ現在及將來ノ臣民ニ對シ此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス

帝國ノ光  
榮ヲ中外  
ニ宣揚ス

惟フニ我カ祖我カ宗ハ我カ臣民祖先ノ協力輔翼ニ依リ我カ帝國ヲ肇造シ以テ無窮ニ垂レタリ此レ我カ神聖ナル祖宗ノ威徳ト竝ニ臣民ノ忠實勇武ニシテ國ヲ愛シ公ニ洵ヒ以テ此ノ光輝アル歴史ノ成跡ヲ貽シタルナリ朕我カ臣民ハ即チ祖宗ノ忠良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ其ノ朕カ意ヲ奉體シ朕カ事ヲ獎勵シ相與ニ和衷協同シ益々我カ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ祖宗ノ偉業ヲ永久ニ鞏固ナラシムルノ希望ヲ同クシ此ノ負擔ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハサルナリ

次で、樞密院議長伊藤博文、帝國憲法を捧呈し、やがて内閣總理大臣黒田清隆、御前に進み、天皇陛下御親ら授け

百一發の  
皇禮砲

給ふのを跪いて拜受する。この時、百一發の皇禮砲ひびきわたり、再び君が代の奏樂が起つて、天皇 皇后は入御あらせられた。

我國憲法  
の沿革

我國憲法の沿革は、崇神天皇の時、詔書を以て、國家統治と國民の守るべき權限を定め給ふた事が、日本紀に見えて居るから、實質上の憲法の行はれたるは、遠く古い事なのである。

○ 「御一新及びその後の制度の改革は、一言以てこれを蔽へば 天皇御親政と萬民輔翼の洪範の實現徹底擴充に外ならぬ。順を追ひ序に循つて實現せられたその結實の成文化が帝國憲法に外ならぬ。帝國憲法の欽定は偶然人爲の一時の權力關係の規範化でもなく、外國の制度先蹤の模倣移植でもなく、人造の主義學說の制度化でもなく、祖宗統治の洪範の時宜に即應して紹述させ給うたものに外ならぬ。」 (國民精神文化研究所述より)

### 涅槃會 (二月十五日)

二月十五日は、釋迦牟尼世尊が亡くなつた當日である。涅槃會とは、釋尊が涅槃に入つた日の佛恩感謝の法會のこととて、寺々では、涅槃像(涅槃に入るさまを描いた繪像)を掲げて式が行はれる。涅槃忌・常樂會ともいふ。

釋迦牟尼世尊は佛教の始祖で、印度の迦毘羅王國城主淨飯大王の太子として誕生され、幼名を悉達多と申上げた。釋尊は長い間、學問修業を積まれ、善い道を説き聽かせられたが、其の説教の書き残されたものが即ち經文である。釋尊が、娑羅雙樹の間に、頭部を北方に、顔を西方に向け、足を重ね、靜に目を閉ぢられた時、東西二本の娑羅雙樹が合して一本となり、南北の二本も合して一本となり、枝を垂れ、葉をのばして、釋尊をおほひかくした。娑羅雙

樹は、四季ともに葉の枯れ落ることなく、花も果實もまた鮮かにつく樹と云はれる。釋尊の涅槃に入りたまふたのは西曆紀元前四百八十六年二月十五日の事で、御年八十歳とのことである。此の日の事は、別に二月八日、二月十五日八月八日、九月八日など異説あるが、支那では二月十五日説を採つて居る。

涅槃とは梵語の音譯で、滅・寂滅・安樂・解脱等とも譯し、單なる「死滅」の意味ではない。即ち佛教悟道の最極意で、生死輪廻の域を脱したる妙所、換言すれば佛教に於ける理想境をさすのである。然し、現世の縁盡きて、一度肉身を消す形に因つて、俗には死滅の意にも用ゐることがある。

印度の佛教は、支那から朝鮮を経て、繼體天皇の御代、始めて我國に傳はつたが、廣く行はれず、次で欽明天皇の御代に百濟王より佛像と經論とを獻するに及び、茲に流行の端緒を開いたのである。

### 祈年祭 (二月十七日)

年穀豊穰を祈る祭儀  
トシゴヒノマツリ

祈年祭は、風雨・旱魃・蟲害などの厄なく、年穀豊穰ならん事を祈る祭儀である。年を祈る祭儀ゆゑ、トシゴヒノマツリといふ。「トシはクヨセ（田寄）なり、神の御靈以て田に成して、天皇に寄せ奉りて祝ふ」（古事記傳）とあり、トシは五穀の總稱で主として稻を云ふことは之にて解される。

伊勢大神宮は二月十七日

明治の御制度にては二月四日、宮内省に班幣の御儀あり、伊勢大神宮並に各官・國幣社に獻進の幣帛を班ち給ひ、神宮には特に勅使をして奉幣せしめ給ふ。官・國幣社には、神社所在の地方廳に幣帛・神饌料を發送せられ、日を擇んで同地方長官をして供進せしめ給ふ。伊勢大神宮にては二月十七日を以て祭儀を行はせられ、また、宮中にて此の日、賢所・神殿にても御祭儀を行はせられる。伊勢大神宮に於ては、勅使参向し幣帛を奉獻せられるのである。

神代に發する

此の祭儀はその意を神代に發するが、國儀としては、天武天皇の四年二月に起ると傳へられ、降つて大寶年代に略よその儀が定まつた。醍醐天皇の延喜式に至り、完全に整備せられて、奉幣にあづかる神祇三千一百三十二座に上り爾後、時に盛衰あつたが、明治以來の宮中御祭儀新例と共に、極めて重要な御祭儀として現今に至つて居る。

祈年祭の祝詞

祈年祭に於ける祝詞は、上代日本國民の雄大なる理想抱負と生々發展の志氣とを表現せるものであるから、左にあげておく。即ち其の中に曰く

上代日本人の雄大理想

「辭別きて伊勢に座す天照大御神の大前に白さく、皇神の見察します、四方の國は、天の壁立つ極、國の退立つ限、青雲の靄く極、白雲の墜坐向伏す限、青海原は柱乾干さず、船の體の至り留る極、大海の原に舟満ちつづけて、陸より往く道は荷の緒縛ひ堅めて、磐根大根履みさくみて、馬の爪の至り留まる限、長道間なく立ちつづけて、狭き國は廣く、峻しき國は平けく、遠き國は八十綱打掛けて引寄する事の如く、皇大御神の寄し奉らば、荷前は皇大御神の御前に、横山の如く打積置きて、残りをば平けく聞着さむ」と、上代日本人の雄大なる理想が表現されて居る。

○班幣とは、神に供する物、即ちミテグラを諸社にわかつ事である。○延喜式は、禁年中の儀武、百官臨時の作法、そのほか國々の恒式を詳に記したる書、五十卷より成る。延喜年間に勅を以て撰進したので其の名がある。○稻は、春に種子を浸し冬收めるまで、凡そ一ヶ年を経る故に、古言に年といふ。○年を掌り給ふ神を大年の神、御年の神と申すのである。

- ◇三郡の水平らかに稻の花露月
- ◇稻掛けて畝傍は行幸待つばかり梅史
- ◇勅使過ぐる伊勢路の晴れを鳴子かな水巴

### 天神祭 (二月二十五日)

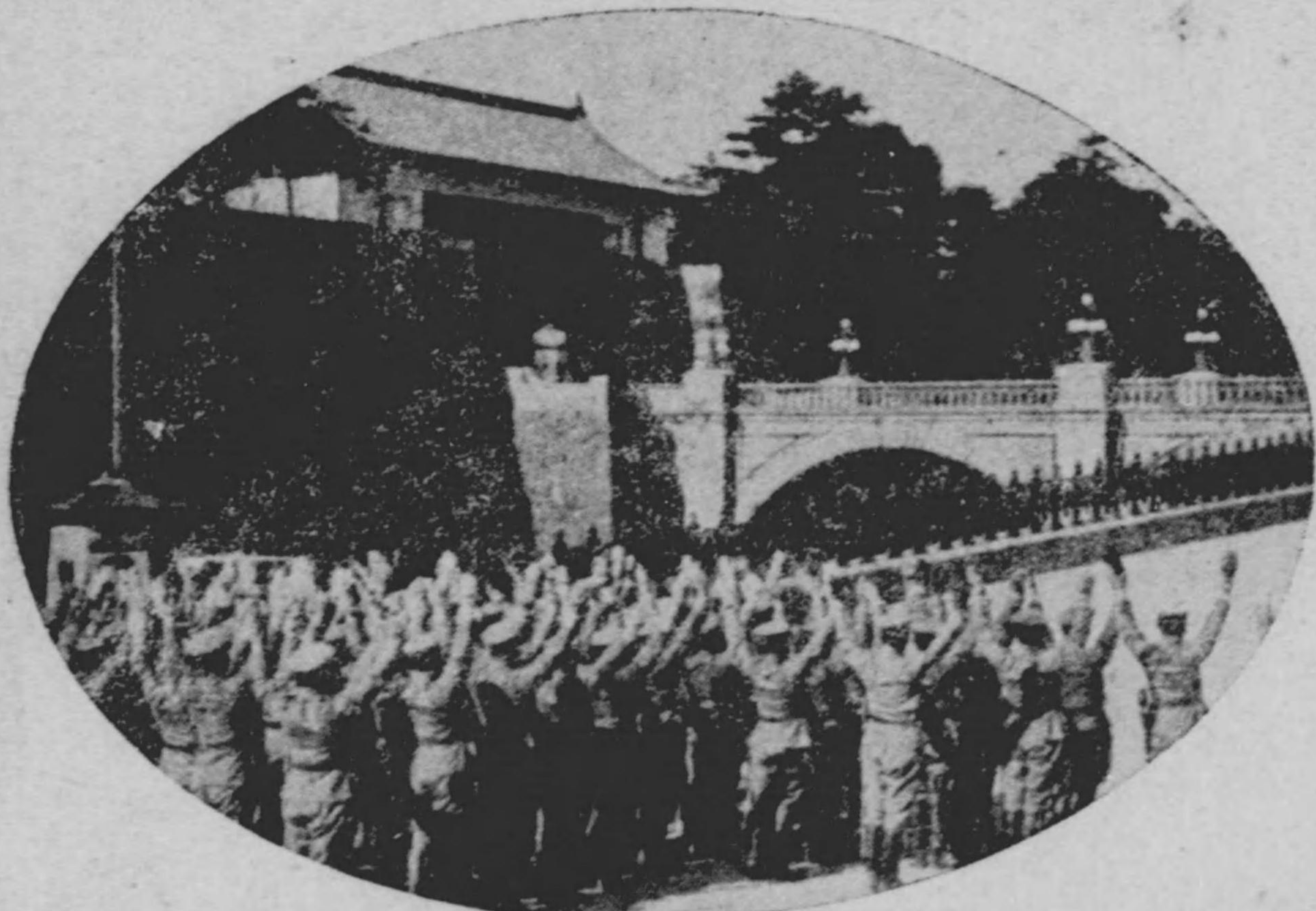
二月二十五日、菅公を祭神とする天神祭が行はれる。天神祭は二月の二十五日のみの祭事ではないが、此の日は、菅公が命を隕されて後、天満大自在威徳天神の稱號を贈られ給ふた公の命日に當る故に、祭事が行はれるのである。右大臣菅原道真は、左大臣藤原時平等の奸計によつて、築紫に流され、三年がほどを憂悶に明かし暮され、延喜三年二月二十五日、命を配所に隕された。御年五十九。

此の日、天神像を掲げ赤飯など供へ、子女中心の御祭をすることは、家庭教育の資として甚だ有意義の事である。菅公に關する話で有名なのは、例の「飛梅」の傳説である。菅公は端役から果進して、一代の寵を恣にした人であるが、延喜元年正月、急に太宰權帥に左遷され、さびしく旅装をととのへて九州路へと旅立つに際し、庭前に目をやると恰も別れを惜むかのやうに日頃愛撫の梅が咲き盛つて居つた。そこで惜別の情に堪へ難く、一首を寄せた。

東風ふかば匂ひおこせよ梅の花 主なしとて春なわすれそ  
 すると愛樹の梅が、都をあとに太宰府へ飛んで行つてしまつたといふのである。今、太宰府神社の社前にある飛梅は三代目のものと云はれる。

- 梅が香にのつと日の出る山路かな (芭蕉)
- なつかしき枝の裂目や梅の花 (其角)
- 二本の梅に遅速を愛すかな (蕉村)
- 梅散りて鶴の子寒き二月かな (鳴雪)

### 三月の行事



宮城二重橋

三月一日 ○J O A K が東京市芝浦高等工藝學校で試験放送開始(大正十四年) ○新國家滿洲國の建國宣言(昭和七年) 即ち滿洲國建國記念日です。  
 ○滿洲國皇帝御即位式御舉行(昭和九年) ○綿糸配給統制規則實施(昭和十三年) ○イタリー文豪ダモンチオ急逝(西曆一九三八年) 享年七十四。○帝國大學創立記念日(明治十九年) ○雉子・山鳥の捕獲禁止 ○雛を飾る。  
 三月二日 ○清宮貴子内親王殿下御誕生(昭和十四年) ○新羅皇太子御來朝(持統帝九年) ○熱河討伐の茂木部隊赤峰を占據(昭和八年) 北熱河は平定されました。  
 三月三日 ○雛祭は古へからの奥ゆかしい行事です。日本精神の發揚に資するに良き機會ですから、出来るだけ健全な方法で行ひます。○井伊大老が櫻田門外に斃れた日(萬延元年) ○皇太子裕仁親王殿下歐洲御巡遊のため御發途(大正十年) ○神部神社 淺間神社・大歲御祖神社(静岡縣)  
 三月四日 ○竹田宮恒徳王殿下御誕生(明治四十二年)  
 三月五日 ○小野お通逝く(元和二年) 淨瑠璃節を改修した女學者。○ハワイ國皇帝御來朝(明治十四年) ○野田神社祭(山口縣)  
 三月六日 ○地久節 皇后陛下の御誕辰を祝し奉ります。此の佳日を「母の日」ともして國民は母の恩愛に感謝の念を捧げます。○雛祭の雛は此の佳日を

お祝ひ申上げてから片付けます。○大日本聯合婦人會發會式舉行(昭和六年) ○山西省蒲州占領(昭和十三年)

三月七日 ○順宮厚子内親王殿下御誕生(昭和六年) ○中江藤樹の生れた日(慶長十三年) ○威海衛占領(昭和十三年) ○揮發油及重油販賣取締規則施行(昭和十三年)

三月八日 ○西安、襄陽飛行場攻撃(昭和十三年)  
三月九日 ○親兵廢止、近衛兵設置(明治五年) ○梨本宮守正王殿下御誕生(明治七年) ○滿洲國盛大なる建國式舉行(昭和七年)

三月十日 ○陸軍記念日 我軍が敵の最後の根城たる奉天占領の日(明治廿八年) 毎年この日を記念して當時の偉勳を偲びます。○勤儉貯蓄記念日も此の日です。明治十二年畏くも 明治天皇は勤儉の勅語を下し賜はりましたので、三月十日太政官から(凡百般ノ政務勤儉ヲ本トシ冗費ヲ省キ務メテ簡實ニ就キ專ラ民生ヲ厚クシ事業ヲ勤ムヘキ事)と國民一般に布告せられたのであります。

○若狭彦神社下社祭(福井縣)

三月十一日 ○加藤清正に從三位を贈らる(明治四十二年) 熊本市の加藤神社(錦山社)及び遺骸を葬る本妙寺には參詣の人が絶えません。○張學良、正式に下野通電を發す(昭和八年)

三月十二日 ○水戸烈公(齊昭)の生れた日(寛政十二年) ○孫文逝く(大正十四年) 民國革命黨の首領。

三月十三日 ハーシェル天王星發見(西曆一七八一年) ○郵便爲替法公布(明治卅三年) ○ヒトラー總統、獨逸合併宣言(昭和十三年) オーストリアはドイツ國の一州となりました。

○春日神社祭(奈良市)

三月二十三日 ○日伊文化協定調印(昭和十四年) これで日・獨・伊の間には防共協定と共に、文化の上にも力強い握手が結ばれました。

三月二十四日 ○國家總動員法案成立(昭和十三年)  
三月二十五日 樋口一葉の生れた日(明治五年) 明治文壇の女流作家。○電氣記念日。明治十一年の此の日、中央電信局と工部大學校との間に、始めて電話が設けられ夜は電池を用ひて我國最初の電燈をつけました。○財團法人軍人會館の落成式舉行(昭和九年)

三月二十六日 ○廣瀬武夫中佐、旅順港口閉塞に向ひ壯烈な最期を遂げた日(明治卅七年) ○帝都復興記念日。帝都復興式典舉行(昭和五年) ○徐州大空爆、廣徳附近討伐(昭和十三年) ○東京・ハワイ間に國際電話開通(昭和十三年) ○ローマでファシスト黨結成廿週年記念祝賀祭が行はれました(昭和十四年)

三月二十七日 ○國際聯盟退盟通告(昭和八年) ○海軍機武漢大爆撃▽台兒莊の一角占領(昭和十三年) ○南昌陥落(昭和十四年) ○日本放送協會、テレビジョン初の實驗放送(昭和十四年)

三月二十八日 ○蠶糸祭日。蠶神和久産巢日神、大宜都比賣神の二柱を祭つて感謝の意を捧げる日です。○中華民國維新政府南京に成立(昭和十三年) 行政院長は梁鴻志。○マドリッド陥落(昭和十四年) フランコ軍は市内に入りました。

三月二十九日 ○平野國臣生る(文政十一年) ○空閑少佐、上海で自決(昭和七年) ○武寧縣城占領(昭和十四年)

○志波彦神社祭(宮城縣)  
三月三十日 ○日清休戦條規成立、兩國全權調印(明治廿八年)

三月十四日 ○五箇條の御誓文を御宣布あらせられたその日(明治元年) 此の記念すべき日を期して、「國民融和日」として毎年融和促進の運動が行はれてゐます。

三月十五日 ○和氣清麿に正一位を贈らる(嘉永三年) ○日洪文化協會設立(昭和十三年) ○カイロ會議でオリンピック東京大會正式決定(昭和十三年) ○貫前神社祭(群馬縣) ○柞原八幡宮祭(大分縣)

三月十六日 ○我が軍、逃る敵を追うて鐵嶺を占領(明治廿八年) ○國立公園雲仙・霧島・瀬戸内海の指定發表さる(昭和九年)

三月十七日 ○イタリイ訪日使節團來朝(昭和十三年) ○海空軍中南支大空爆▽臨城占領(昭和十三年)

三月十八日 ○退却將軍クロバトキン總司令官の職を免ぜられ、第一軍司令官リネウキツチ將軍が總司令官となりました。(明治廿八年) ○長江下流の崇明島に上陸占領(昭和十三年)

○宇佐神社祭(大分縣)

三月十九日 ○津浦戰線・韓莊・嶧縣等陥落(昭和十三年)

三月二十日 ○ニュートン逝く(西曆一七二七年) ○ノルウェーの文豪イブセンの生れた日(西曆一八二八年)

三月二十一日 ○弘法大師入寂の日(承和二年) ○賤ヶ岳の激戰(天正十一年) ○獨逸、オーストリアの聯盟退盟通告(昭和十三年)

三月二十二日 ○ドイツ詩人ゲーテ歿(西曆一八三二年) ○J.A.K.の假放送開始の日(大正十四年) 此の日を以て放送記念日と定めました。○廿一日夕から函館市に大火災起り本日夕に至つて漸く鎮火(昭和九年) ○入營者職業保障法成立(昭和十三年)

○ムツリイニ伊首相を最高元帥に推戴す(昭和十三年)

三月三十一日 ○我が航空界の權威を網羅して航空學會の發會式を舉行(昭和九年) ○新南群島を臺灣總督府の管轄に屬せしめる旨、外務省より發表(昭和十四年)

### 愛國標語

- ◇歴史は輝く三千年
- ◇日本精神世界にあげよ
- ◇東洋平和は日本の使命
- ◇老いも若きも總だすき
- ◇心は豊かに暮しは地味に
- ◇骨身惜しまず勤勞奉仕
- ◇からだ鍛へてこゝろを磨け
- ◇良い習慣は子供の時に
- ◇やがて僕等も皇軍勇士
- ◇仰げ富士の嶺祖國の姿
- ◇堅忍持久鐵より固し
- ◇みんな御國の大黒柱

### 雛 祭 (三月三日)

家庭的祭  
事  
人形流し

三月三日、女兒ある家では雛人形を飾り、早咲の桃の花を活け、菱餅、草餅、あられ、白酒などを供へ、雛祭と稱して家庭的祭事を行ふ。此の雛祭が五節句の一に數へられて、三月三日の事となつたのは後世である。それ以前は、「祭」ではなくて、子女の「遊び」、即ち雛遊びであつた。更に雛遊びを溯ると、それは神道儀禮の「人形流し」といふ土俗に起りを有するのである。我々の祖先は、三月上の巳の日の祓に人かたを作り、諸々の犯せる罪穢を此の人かたに背負はして水に流したのである。雛とは大きな物を小さくした物のことであるから、人間の雛形といふのが一つの通義となつて居る。雛は、つまり自分及び一族の者に擬した身代り雛形に發して居る。例へば天兒と云つて、赤子の形に擬したものを作り、之を赤子の枕許に置き、赤子の災厄の身替りをさせた事は古くからあるが、此の天兒は即ち赤子の雛形である。赤子が健康に育てば、天兒に御禮として衣裳を着せ、赤子の遊び相手とする。這子は天兒の變化したものである。「源氏物語」(須磨の禊の卷)にも、身代りの人かたを舟にのせ海に流すとあり、當時に於ても穢を流すといふ信仰のあつた事が知られる。

源氏物語

雛は祓に用ゐられる形代と一種の玩具に類する雛形と二様の説に起るが其の精神からすれば起りを一に歸して差支ないと考へる。故に初期の雛は人の名や年齢を書いて人かたの意味を示し、それは、手作りのものであつた。此の信仰的意味を有したものを子供は手作りして飾り眺め居るうちに、此の事が娯樂行事化したのである。従つて随時に飾り樂しんだのであるから、初めは舊曆の三月三日と定つて居つたものではない。

五節句の一

三月三日と固定した事については、足利末期より江戸初期と追々定まり來つたが、これは三月三日の上巳の祓の

雛は紙片  
の雛形

形式と雛遊びの雛とが混同され、上巳の日に雛が特に持ち出されて遊ばれ、それが完全に混合されて、行事としての五節句の一となり、雛遊びから雛祭と轉じたものである。故に雛祭そのものは、恙なく育てとの親心の發露であるから、女の爲のみの祭ではなく、男女子共通のものであるわけだが、人形と雛と結び付くに及んで、女兒の爲の行事と化した。然し未だ當時は、お祖母さまの雛、お母さまの雛など云つて、雛のみを飾り、道具や美々しい供物などはなかつたのである。

かみ雛

雛は紙片の雛形に發し、次第に首が付けられ衣裳を纏はせ、男女の區別も出來たが、また木の棒に綾錦を巻きつけて衣裳とし、目鼻をつけ、これを自分の身代りとして寺へ納め、無難を祈願したりもした。これらは何れも立雛の發端で、立雛とは立姿の雛の總稱である。かみ雛といふ稱は、紙で作つた紙雛のことでもあるが、木彫のものでも神の字を當て、かみ雛と云ひ、立雛の總稱のうちに包含されて居る。立雛の衣裳の模様には、多く松と藤が見られるが、松は男性、藤は女性を表象し、夫婦相和の象と見ることが出来る。徳川期になると雛人形の製作者に優れた手腕の者が現れ、寛永頃には立雛に對して座雛が制作されるやうになつた。次で元祿を中心に種々趣向を凝らした精巧な雛が祭壇に並ぶやうになり、道具も贅澤なものとなつたので、其の筋の禁令すら出るに至つた。幕末から明治維新に際しては國家多事の折柄とて雛祭の事は衰退し、明治を経て、大正の大震災を一區劃として今迄忘れられて居つた雛繪や種々な人形雛が迎へられ出した。

夫婦の相  
和の家

菜の花  
人の話

江戸時代に、貧しい姉妹があつた。他の家では立派な雛を飾つてあるが、自分達には飾る雛がない。そこで菜の花を摘み、花を首に擬し、落松葉を足に擬して飾つたといふ話がある。これは菜の花人形と云はれて居るが精神はこれでよい。本義を忘れて形式に墮し、雛飾の陳列美を競ふに至つては、家庭的祭事の意義を没却したものである。

東洋大學教授關寛之氏は、提案して曰く「家庭的祭典として饗應が家庭的たる限度に於いて意義をもつ。されば、

近代的の  
雑祭  
家事実習  
の好機會

この日は女兒が父母や男同胞を招待して祝福してもらひ、家族と共に罪過を人かたに託して清算する時であるから、料理、接待から年齢に應じて家事を實習する好機會である。幼いものは運び、長じたものは料理し、中間は接待するといふやうに、手わけをして行はせたいものである。仕出屋の料理を取寄せ高價な商品雜のきら／＼と新しいものを並べては何の意義もないのである。」

○せつくはせちくで約まつてせくとなる。節句・節供の文字があるが、原意は季節の替り目に、日を期して食物を調へ神を齋き、自分も食して邪氣を拂ふことであるから、節供が其の意にかなふのである。

○三月三日の節句は、三が重なるから重三の節句とも云ひ、また桃の節句とも云ふ。

○「關東曲水の宴」は王羲之が會稽山に四十一人の文人と會遊して三月の候に宴を開いた事實によつても證される。

日本では、雄略天皇の元年三月上の巳の日、清苑に行幸あらせられて、曲水の雅宴を御催し遊ばされたことが記録されてゐるほか、村上天皇の康徳元年にもそのことがあつた。なほまた源氏物語中の光源氏曲水の宴や、菅原道真公の「曲水の詩」、慈鎮和尚の曲水の歌などもある。有名な定家卿の歌に「唐人のあとを傳ふる盃の浪にしたがふ今日も來にけり」(西澤笛吹氏「雜ものがたり」)

○雑飾は、通例四日にかたづけけるが、皇后陛下御誕辰の三月六日の佳日を、此の前で奉祝して後、かたづけければ一層意義を深めるものである。

摘 草

春の野邊に出でて、生ひそめて來る野草を摘む事は、古今を通じ、上下階級の分ちなくありしまゝなる姿にて、今

詩の生活  
化

に繼承されてゐるもの一つである。大空の下に陽光を浴び、嫁菜・芹・土筆・蒲公英・げんげ・茅花など摘むことは、單に趣味、行樂とのみ言ひ切れぬ、餘りにも和かな樂しみである。心境からいつても、行爲からいつても、それは産みの母なる大地の中に溶け和した生活、意識せざる「詩の生活化」とも見られる。「我事と泥鰌の逃げし根芹かな」(丈草)の句は、芭蕉も讃めたといふことであるが、根芹を摘まうと田の水中に手を入れた途端、泥鰌が驚き逃げた光景が見えるやうで、ほゝゑましい句である。「前垂に摘草あまる日暮哉」(四方太)、「前垂に」がよく生きて居る。摘草といふと、古い時代の子日遊・若菜摘みの事も偲ばれ、貫之の歌「春日野の若菜つみにや白たへの袖ふりはへて人のゆくらん」とあるを見ても、それが春の行事であつたことが知られる。「君がため春の野に出て若菜つむわが衣手に雪はふりつつ」の光孝天皇御製は百人一首でお馴染のものである。

摘草は、新曆では二月は早過ぎ、三月中旬頃から四月へかけてが、摘み頃の時である。尤も地方と其の年の氣候によつて、異なることは勿論である。

皇后陛下御誕辰 (三月六日)

三月六日は、長くも、皇后陛下の御誕辰である。皇后陛下は明治三十六年三月六日御誕生あそばされた。三月六日の佳き日を地久節と申すは「天長地久」の語に據り、天皇陛下の御降誕を天長節と申すに對してのことである。全國女學校では、學業を休み慶祝の意を表しまつる。小學校に於ても、講堂訓話或は各學級訓話によつて、皇后陛下の御坤徳を兒童に説話する事が肝要である。東京市では、國旗掲揚定例日と定めてあるから、勿論全國でも之

に従つて居る。

此の日、拜賀のため参内する範圍は、宮中席次第一階第一乃至第十六の者及び宮内高等官であると承る。此の佳き日は「母の日」とも申して、大日本婦人聯合會は勿論、全國民舉つて、女性を中心とする意義深い奉祝の催しが行はれる。

○

「母の日」の事は、ヨーロッパ及びアメリカ合衆國にもあつて、殆ど世界各國に行はれて居るが、日本のものとは精神が異つて居る。

### 陸軍記念日 (三月十日)

奉天大會  
戦の大勝

三月十日は、陸軍記念日である。此の日は、明治三十七・八年の日露の役に於て、我が陸軍のつはものが力戦奮闘、奉天大會戦に露軍の死命を制し、大勝利を博したる記念の日である。即ち五月二十七日の日本海大殲滅戦と相俟つて日露戦争をして終局に導くの因を作り、大日本帝國の國威を中外に發揚し、國運を決定したるの日である。

滿洲軍總  
司令部の  
訓示

明治三十八年二月二十日、奉天會戦に先だち、滿洲軍總司令部は各軍司令官を會し、攻撃準備の命令並に訓示を與へたが、其の訓示第一項は左の如くである。

「近く目前に横はる會戦に於ては我は殆ど日本帝國軍の全力を擧げ、敵は滿洲に用ひ得べき最大の兵力と思はるゝ軍隊を提げて以て勝敗を賭せんとす。是れ重要中の重要な會戦にして此の會戦に於て勝を制したるものは此戰役の主人となるべく實に日露戦争の關ヶ原と云ふも不可なからん。故に吾人は此會戦の結果をして全戰役の決勝とな

す如く勉めざるべからず。」

當時の様を陸軍省發表の記述に據つて概記すれば、奉天會戦は川村大將の率ゐる鴨綠江軍、黒木大將の率ゐる第一軍、野津大將の率ゐる第四軍、奥大將の率ゐる第二軍及び乃木大將の率ゐる第三軍即ち日露戰役出征部隊の大部分が之に参加し、三月一日總攻撃開始以來、我が巧妙なる包圍作戰によつて、クロバトキン將軍も施すに術なきに至り旬日に互る奉天死守も我が將兵の猛攻に撃ち破られ、三月十日、北方の逃げ口より辛うじて潰走したのであつた。時に我が戰闘總員二十四萬、死傷七萬、之に對し露軍の戰闘員は三十二萬、死傷九萬、軍旗三旒、砲約五十門、俘虜二萬一千の夥しき數であつた。

大會戦の  
捷報

斯くして大會戦の捷報、逸早く傳はると、列強の輿論は齊しく帝國軍の勝利を嘆賞し、露國が速かに和を講ずるを以て賢明なる得策なりと爲した。一方露都に於ては十一日クロバトキンより「昨夜我が全軍退却に著手せり」との簡單なる電報が到着したに過ぎなかつた。されば何人も敗北の程度を知るに由なく、悲觀論者はクロバトキンは包圍せられ第二のペレーヌ元帥（普佛戰爭の時のメツ要塞司令官）となるだらうと心痛したほどで、群衆は參謀本部に殺例して詳報を發表せよと叫ぶなど、悲壯極まる幾場面が現出された。然し露都人民の大半は極東の軍隊が大敗を受けたのも敢て意に介せざるもの如く、たゞ新聞號外賣がクロバトキンの三行報告を賣り歩いたとのことであつた。

奉天會戦

奉天會戦は三月十日を以て我軍の大勝利に歸したが、敵は依然、豫定の退却と豪語して鐵嶺に據り更に遠く哈爾濱迄來いと意氣巻いて居つた。されば當時、大本營の苦慮は想像に餘りあるものがあつた。然し、戦線銃後、官民一體、億兆心を一にし、眞に忠誠と國民精神總動員の實を擧げ、此の國難にめでたく打ち勝つたのである。

支那事變の有様と思ひ比べ、眞に感慨深きものがある。

陸軍記念日

陸軍記念日の定められた所以のものは、戰勝記念日の慶祝と共に、國民の愛國心を涵養し以て一朝有事の際、心身



を捧げて君國に報ぜんとする志氣を鼓舞する意のもの<sup>こころ</sup>と解さねばならぬ。

國民の標語

「備へよ常にあらゆる力」  
「國民精神總動員を日常生活の上に」  
「戦争に勝つたくて油断すな」

勤儉貯蓄記念日 (三月十日)

勤儉の勅語の下賜

畏くも 明治天皇は維新以來屢々國內の庶政民情を御親閲あそばされた上、勤儉、勲業、厚生の實を擧げさせ給はむとの大御心より、明治十二年勤儉の勅語を下し賜はつた。此の有難き 聖旨を拜し、三月十日太政官より勤儉貯蓄の布告が發せられた。逕信省が此の日を勤儉貯蓄記念日と定め、他の貯蓄機關とも協力して、特に勤儉貯蓄思想の普及に努めて居る所以である。

勤儉ノ勅語

朕幼冲ニシテ國ノ艱難ニ際シ祖宗ノ威靈ト諸臣ノ力ニ頼リ中興ノ大業ヲ爲スコトヲ得タリ惟ミルニ世運實ニ非常ノ機ニ當リ猶ホ成ルヲ樂ムノ日ニアラス内祖宗ノ國光ヲ墜サス外各國ト對峙セントス朕菲徳何ヲ以テ之ニ堪ヘン今親ク民事ヲ察スルニ生産未タ振ハス富庶ノ實或ハ未タ進ムコトヲ加ヘス朕深ク以テ憂トナス茲ニ念フ異國ノ本ハ勤儉ニアリ祖宗實ニ勤儉ヲ以テ國ヲ建ツ今富強ノ實未タ舉ラスシテ遽ニ奢侈ノ弊ヲ踏ムアラハ責メ朕力躬ニアリ朕誠ム己レヲ勵シ天下ノ標準ヲ爲サンコトヲ思フ諸臣ニ語ク宮禁ノ土木其レ務メテ儉素ニ就キ進御ノ物其レ務メテ質朴ヲ

用キ冗費ヲ省略シテ以テ業ヲ勤メ本ヲ培フノ資ニ充テヨ諸臣其レ民ヲ富マシ生ヲ厚クスルノ謀アラハ各見ル所ヲ盡シ以テ朕力速ハサルヲ輔ケヨ

天下に公布された太政官達は次の通りである。

各地御巡幸親シク民事ヲ被察内政深ク御軫念被遊今般左ノ條々被仰出候

- 一、凡百般ノ政揆勤儉ヲ本トシ冗費ヲ省キ務メテ簡實ニ就キ専ラ民生ヲ厚クシ事業ヲ勤ムヘキ事
- 一、官省ノ建築其他一切ノ土木既ニ着手シタル分ヲ除ク外可成省略可致事
- 一、各地方官ニ於テモ厚ク旨意ヲ奉體シ費用ヲ節略シ民力ヲ愛養スヘキ事

三月十日は斯様に洵に意義ある日であるから、日本國民は齊しく 聖旨を奉體して、勤儉力行、以て國本の培養に努めねばならぬ。此の有難き 聖旨は何時の世、如何なる時でも常に服膺して、これを生業に活用し一層の心構へを強化することが肝要である。

昭和十一年三月十日の都下各新聞紙には、次の通り載つて居る。

今般全國貯蓄銀行相計り貯蓄思想ノ普及ヲ圖ル趣旨ニ依り毎年「三月十日」ヲ勤儉貯蓄記念日ト相定メ候本日ハ其ノ第一回記念日ニ付茲ニ謹告候也

昭和十一年三月十日

- ◇進む皇軍あとおす貯蓄
- ◇貯へは國に盡して身に戻る
- ◇國は我等の一錢に富む

勤儉貯蓄記念日

日本國民  
は聖旨奉

### 國民融和日 (三月十四日)

三月十四日は、長くも 明治天皇が五箇條の御誓文を御宣布あらせられたその日である。

明治天皇の祭政一致の御精神

義國の大

差別制度の撤廢

明治天皇は、神武天皇の祭政一致の御精神を御繼ぎあそばされる深い大御心に依つて、明治元年三月十四日、京都皇宮紫宸殿に神座を設け給ひ、親王・公卿・諸侯を従へて出御あらせられ、御親ら天神地祇を御祭りになり、五事の國是を天地神明にお誓ひあそばされた。同時に、親王始め公卿・諸侯は五事の國是を、天皇に誓ひ奉つた。次で萬民安撫の御宸翰を國民に賜はつた。總てのまつりごとは、これに基いて行はれる。此の肇國の大義を基とする改新の國是に於て、就中「舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ」と仰せられた御言葉の中に、維新の大精神が端的に拜されるのである。明治四年八月太政官布告を以て差別制度が撤廢せられ、四民平同、一視同仁の 教旨の下に萬民齊しく皇恩に浴するに至つたのは、實に此の大精神の具現である。依つて財團法人中央融和事業協會は、昭和五年以來、此の日を國民融和日と定め、全國の融和事業團體と相呼應して、此の日を期し、記憶を新たにしつつ融和促進、國民總親和發露の運動を行ひ來つてゐるのである。然るに支那事變勃發して以來、國を擧げて國民精神總動員に參じ、億兆心を一にして銃後の護りを堅くせんとする此の秋(昭和十三年)、當局では一層國民融和の徹底を圖るの必要を痛感して、竝に三月十一日より御宣布の日を中心とする一週間を「國民融和週間」として、其の間、各種の行事に依り國民一般の理解を深め、目的達成を圖らむとすることとしたのである。

國民融和日は、初め昭和四年十一月三日、財團法人中央融和事業協會主唱の下に行はれたのを起りとするが、此の日は他の催しと合致する故に、翌年より五箇條の御誓文煥發記念日である三月十四日と改めたものである。

### 春季皇靈祭 (春分の日)

皇靈祭は、春秋の二季、三月春分の日と九月秋分の日、宮中皇靈殿に於て、御歴代の皇靈 皇后・皇妃・皇親の御靈を御親祭あらせられ、同時に、神殿に於て、八神並に天神地祇を祭らせ給ひて、大孝を申べさせ給ふ御儀式である。

大孝を申べさせ給ふ御儀式の御即位

皇靈祭を春秋二季に行はせられることは、明治維新後、明治天皇の定められたところであるが、皇室に於かせられて御先祖の御靈を祭り給ふことは、遠き世からの御事である。神武天皇は、大和地方を御平定あそばされて、御即位の後、靈時を鳥見の山中に立てさせ給ひて、皇祖の天神を祭り給ふた。其の時の御詔に「皇祖の靈が天より降りひかりて朕が躬をてらし助け給ふた。今もろくの賊はずでに平ぎて、海内事無く治まつたから、ここに天神を祭つて大孝を申ぶるものである」と仰せられた。また天武天皇の十年五月にも、皇祖の御靈を祭られた。中世以後には、荷前の祭と申して、毎年の歳の末、國々から奉獻する荷の初穂を幣物として、諸の神社、御代々の山陵に奉る儀式があつた。此のことは、皇靈を祭り給ふ御思召である。

明治二年六月、明治天皇には百官群臣を従へて神祇官に行幸あらせられて、天神地祇及び御代々の皇靈を御親祭あそばされた。同年十二月、神祇官中に新たに建てさせられた神殿に、八神並に天神地祇と共に御代々の皇靈を鎮祭せしめ給ひ、年を越えて正月三日に、八神・天神地祇並に御代々の皇靈を御親祭あそばされ、國家隆昌を御祈りなされた。

明治十年には、更に歴代の皇后・皇妃・皇親の御靈をも皇靈殿に合祀せられることと定め給ひ、明治十一年六月五日太政官達第二十二號を以て、次の如く定め給ふた。

皇靈を祭り給ふ御思召

明治天皇の御祈り

綏靖天皇以下後櫻町天皇迄御歴代御式年御正辰祭共被廢更ニ春秋二季祭ヲ被置神武天皇ヲ御正席トシ先帝迄御歴代並ニ后妃以下皇親御合祭被執行候條此旨相達候事

但神武天皇及ビ御桃園天皇以下御近陵御式年御正辰並ニ其后妃皇親御配享ノ儀ハ従前ノ通被執行候事

春季皇靈祭 春分日

秋季皇靈祭 秋分日

皇靈祭の御次第

皇靈祭の御次第は、皇靈殿朝の御祭典、皇靈殿並に神殿御親祭、皇靈殿夕の御祭典と引續き行はせられると承る。當日は午前八時、御殿の御裝飾をなし、式部職官員が、朝の御祭典を奉仕、午前十時、天皇陛下には黄櫨染御袍の御束帯を召されて内陣の御座に御参進、御玉串を奉られ、御拜、御告文を奏し給ふ。次に神殿にも御同様、御拜、御告文を奏し給ひて入御あらせられる。皇族方、諸員の拜禮を以つて終らせられる。夕の御祭典も式部職官員着床、以下各退出に至るまで朝の御次第に同じと承る。

此の日、皇大神宮を始め、官・國幣社以下各神社に於ては、遙拜式を行ふことになつて居る。

（次に、宮内省諸陵頭渡部信氏の講述に據つて、御陵墓の事を摘録する。）

御陵墓

「御陵墓とは天皇と皇族のおはかのこととあります。詳しく申せば 天皇太皇太后皇太后皇后この方々の御墳塋を陵みささぎと申上げ其他の皇族方の御墳塋を墓と申上げます。御陵は又山陵若は皇陵と申上ぐることもあります。

現在御陵のあるお方

現在御陵のある方は、御歴代の天皇百二十方御歴代の天皇以外の方八十二方で、一般皇族方の御墓のある方は五百三十三方であります。今少しく之を説明すれば、御歴代の天皇は先帝に至る迄百二十三代であります。御三十三

百二十方の天皇陵

將來の御陵墓

七代齊明天皇は御承知の通第三十五代皇極天皇が再度御位に即かせられたる所謂御重祚の方であり、又第四十八代稱徳天皇も第四十六代孝謙天皇の御重祚故、この御二方の御陵は當然各々御一つであります。尙大正十五年十月二十一日煥發せられました詔書を以て第九十八代の天皇として御歴代に列せられたる長慶天皇は未だ御陵の御治定がありません。結局百二十三代中百二十方の天皇陵を拜する次第であります。（中略）

大正十五年十月皇室陵墓令が制定せられまして、御陵墓に關する制度が確立せられ幾多重要な規定が設けられました。今其規定の一二を申述べれば、將來の御陵墓を營建せらるべき地域は東京府及之に隣接する縣にある御料地、換言すれば帝都を距ること遠からざる土地に於て陵墓地を勅定せらるることを原則と定められました。原則と申しますのは特別の御思召により或は例外もあり得る次第かと存せらるるからであります。又皇室陵墓令は御陵の形は上圓下方又は圓丘とすると定められました。上圓下方とは上部が圓形で下部が方形のものであります。上圓下方は誠に質實堅牢にして且森嚴崇高なる御形であります。遠くは第三十八代天智天皇山科陵（京都市東山區）、近くは伏見桃山兩陵の御形が即之れであります。尤地勢其他の事情により必しも上圓下方型に依り難い場合は、圓丘即圓き山の形の御陵を營建せらるる御主旨を以て、陵墓令には上圓下方又は圓丘とすと定められたるものかと思料致します。一方皇族方の御墓の形に就ては陵墓令に別段の規定がありません。（下略）」（紀元二千六百年、皇陵）

彼岸（附、春分）

春分の日

彼岸は春分の日を中日として前後三日づつ七日間にわたる。即ち彼岸の「入り」の日から「明け」の日迄で、家庭では彼岸法事を行ひ、寺院には彼岸會法要が修行される。秋の彼岸は秋分の日を中日とする。彼岸は専ら佛事に用ゐるが、春秋の氣節の稱ともなつて居る。氣節は農事に最も重要なものであるから、氣節の稱となつたことは農事から

春季皇靈祭

聖徳太子の時代から家々の行事

出た事であらう。「暑い寒いも彼岸まで」と云ふ通り、寒暑の差少く、氣候まことに身體に適和する頃である。彼岸の事は我國にのみ行はれる習慣で、これが最初に行はれたのは聖徳太子の時代からであると考へられる。彼岸には家々では墓詣をなし、彼岸の供養と稱へて、團子・萩の餅・精進餅など拵へて佛前に供へ、親戚知己にも配る事をする。また、七墓詣と稱へて、名家の墳墓七所を尋ねて詣る事あり、中日には諸社の石鳥居を七所くゞり、七度に及べば長き病なく、往生安樂を遂げ得るとの信仰もある。或は中日（又は時正）は日輪正面に没するとも云ふ。即ち正東より日出で眞西に没する。これ彌陀佛の在す國、眞西日の没所に當る故に、其の在所を衆生に示して、往生を遂げしむるなりとも云ひ、中日に日の没るを拜む俗信も生じて居る。東京地方では六阿彌陀詣と稱して、行基上人の一木六體の彌陀佛を安置しある寺々へ詣る風がある。

彼岸の起源

彼岸の起源としては、先づ佛敎定説を認め、さて異説として「之れを神道に求めて、ヒガンは日岸である。寒暑和平、晝夜長短なき日の中の岸、神事を専らとし、神直日神を祭らざるべからず、牡丹餅を作るは牡丹の花になぞらへて、神ながらの赤誠を現はすなりとの主張があるから、参考迄に記しておく。」とも出て居る。（年中事物考）

春分の日は、晝夜平分で晝間と夜間との長さが同じと云ふが、正しくは、春分の日晝間の長さは、夜間の長さより僅少なから長いのである。依つて、晝間の長さとな夜間の長さとの、最も接近する日とするのが、俗には穩當のことである。

彼岸の日を知るには毎年のめぐり、曆を見るか、春秋二季の皇靈祭當日（春分・秋分）を中心として繰るが便宜である。

○彼岸とは梵語「波羅密多」の譯語、「到彼岸」の略である。即ち六波羅密（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧）、此の六道を修するといふ意味。生死の世界が此岸で、菩薩を渡舟として、不生不滅の涅槃の世界に達することを到彼岸といふ。

### 電氣記念日（三月二十五日）

中央電氣局の開業式

三月二十五日は、我國の電氣記念日である。これは明治十一年三月二十五日、東京市京橋木挽町に新設せる中央電氣局の開業式が擧げられ、其の日の祝ひとして、中央電氣局と工部大學校（帝大工學部前身）との間に、初めて電話が設けられた。夜は、開業式祝宴を工部大學に開くに當つて英國人エーヤトン教授指導の下に、グローブ電池を用ひて我國最初の電燈（アーク燈）を點けた。勿論、當時我が新造の軍艦には電燈を採用してゐたが、點火は極めて稀であつたとのことである。此の事あつて以來、電氣の不思議な光、電氣の發する音など、電氣の話が廣く傳はるやうになつたのである。此の我國電氣の誕生である日を記念するため電氣記念日は昭和三年から催され來たつたのである。

電氣の發見

電氣の發見は遠く古代ギリシアの昔に溯るが、これの應用發達には専門學者・技術家の苦心努力は並大抵のものでなかつたのである。また工場で機械器具を製作し、發電所で電氣設備を取扱ひ、電柱の上での架線・保線の作業に際しては、幾多の犠牲者を出して居るのである。これらの恩人に對して、我々は、此の日に於て、深き感謝の念を新たにしなければならぬ。此の新たな感謝の念は、同時に將來への精進努力となり、より良き電氣文化建設への勇躍となる。此の意味に於て電氣記念日を祝福したのである。

電燈心得十ヶ條

#### 電燈心得十ヶ條

- 一、不要な電燈は手まめに消すこと。
- 二、電球や笠のはこりは布で拭くこと。

- 三、眼先のキラ／＼、はだか電燈は眼にわるい。
- 四、燈火管制の外は電球を布や紙で包まぬこと。
- 五、普通の電燈線から五百ワット以上の電熱器を使はぬこと。
- 六、コードに結び玉をつくらぬこと。
- 七、コードを釘に懸けたり、襖や障子に挟まぬこと。
- 八、コード濡らすな、濡手で觸るな。
- 九、素人細工はわざはひの因。
- 十、盗用は身のつまり。

### 卒業證書授與式

#### 重要な 学校行事

学校行事の中で、卒業式の日に入學式の日と共に、重要な日であつて、心から祝福し、祝福される日である。上の学校も同様ではあるが、取り分け尋常小學校・高等小學校の業を卒へて卒業證書を授與される時の感激と印象は、終生忘れることの出来ぬものである。第二の國民は先づ小學校に於て、人間生活の基礎たるべき智・徳・體の教育を積みこゝに校門を巢立つのである。父兄より見るも、愛する兒童が師の深き愛と厚き教養とに育てられて業を卒へたのであり、師より見るも、多年の愛育によつて若き芽生を若木にまで仕立て上げたのであるから、共に祝福の感、全身に充ち滿つるは當然のことである。卒業し行く者もまた、此の日に於て、特に多年の師恩に報ゆるの心を深くせねばならぬ。家庭に於ては、卒業證書を神前に供へ、氏神に参拜して、めでたき卒業の事を報告し、更に在校中の幸福、感

#### 師恩を思 ふ

謝すると共に、將來の努力・奮勵を誓ふ慣はしとしたいものである。猶、學年修業證書を授けられたる者は、過去一ケ年を回顧・反省することになつて、更に新生への良き資とするところが大切である。

### 蠶 絲 祭 (三月二十八日)

#### 蠶神を祭 つて感謝

蠶絲祭は、宮中に於ける御養蠶所の御例に倣ひ、蠶神を祭つて報恩感謝の誠を捧げると共に、併せて蠶絲宣傳と絹物愛用を鼓吹するため行はれるものである。昭和十年一月、日本中央蠶絲會の通常總會に於て決議せられ、同年三月二十八日、蠶絲關係法規制定の日を卜して、全國的に催されたのが、其の起りである。

#### 蠶絲祭日の制定趣意並實施事項

#### 制定の趣 旨

一般國民に對し我國經濟に至大の關係を有する蠶絲業の重要性を認識徹底せしめ關係業をして各其の業務の改善發展を思念せしめ併せて絹物使用上の經濟的觀念を匡正し大に絹物愛用を鼓吹し生絲消費増進に資するが爲「蠶絲祭日」を制定するものとす。

- 一、毎年三月二十八日を「蠶絲祭日」とす。
- 一、全蠶絲關係者は蠶絲祭日に於ては一家を擧げて敬虔以て蠶神を祭祀すると共に歴代天皇の斯業獎勵に恩謝の意を捧ぐることをす。
- 一、蠶絲祭日を中心として蠶絲關係者(織物業を含む)は蠶絲絹物の改良並に普及に關する事項を實施すること。

一、蠶絲祭日を中心として蠶絲業各團體は單獨又は織物に關する團體若くは百貨店其他絹物販賣業者と協力又は聯絡を圖り蠶絲及其の製品の改良並普及に關する事項を實施すること。  
 猶、會長祭文の中には、「謹デ按ズルニ我國ノ蠶絲ハ遠ク天照大神ノ御時ニ起リ、和久産巢日、大宜都比賣ノ諸神ニ依リ之ヲ民下ニ授ケ給ヒ民ノ生業トナルヤ神之ヲ知食シテ加護ヲ與ヘラレ歷代ノ皇室亦斯業ヲ獎勵シ給フ詢ニ感謝ニ堪ヘザルナリ

蠶絲ハ開國以來一張一弛久シク稱スルニ足ラザリシモ安政年間ノ開港ニ依リテ海外販出ノ途啓ケ爾來急速度ヲ以テ勃興シ途ニ輸出品ノ巨臂トシテ貿易ノ消長ヲ支配スルト共ニ農村ノ經濟ヲ左右スル重要産業タルニ至レリ是レニ天神我國土ヲシテ斯界ニ適應セシメ民心ヲ之ニ嚮ハシメ給ヒタル賜ニシテ國民ノ感奮措ク能ハザル處ナリ」とある。

**御養蠶始の御儀**

御養蠶始の御儀

皇后陛下には九日青葉の宮中紅葉山御養蠶所に御出ましになり、御養蠶始の儀を行はせられた。この朝、陛下には爽かな御洋装を召され、廣幡皇后宮太夫、保科女官長以下を従へさせられて午前十時、大奥から同御養蠶所へ有泉御用掛以下の奉仕をうけさせられて春蠶蠶量十一匁、日支、歐支交配等優秀蠶の御掃立をあそばされ御機嫌うるはしく拜せられた。(昭和十四年五月)

國民學校 儀式行事精義 (終)

昭和十六年五月十日印刷  
 昭和十六年五月二十日發行

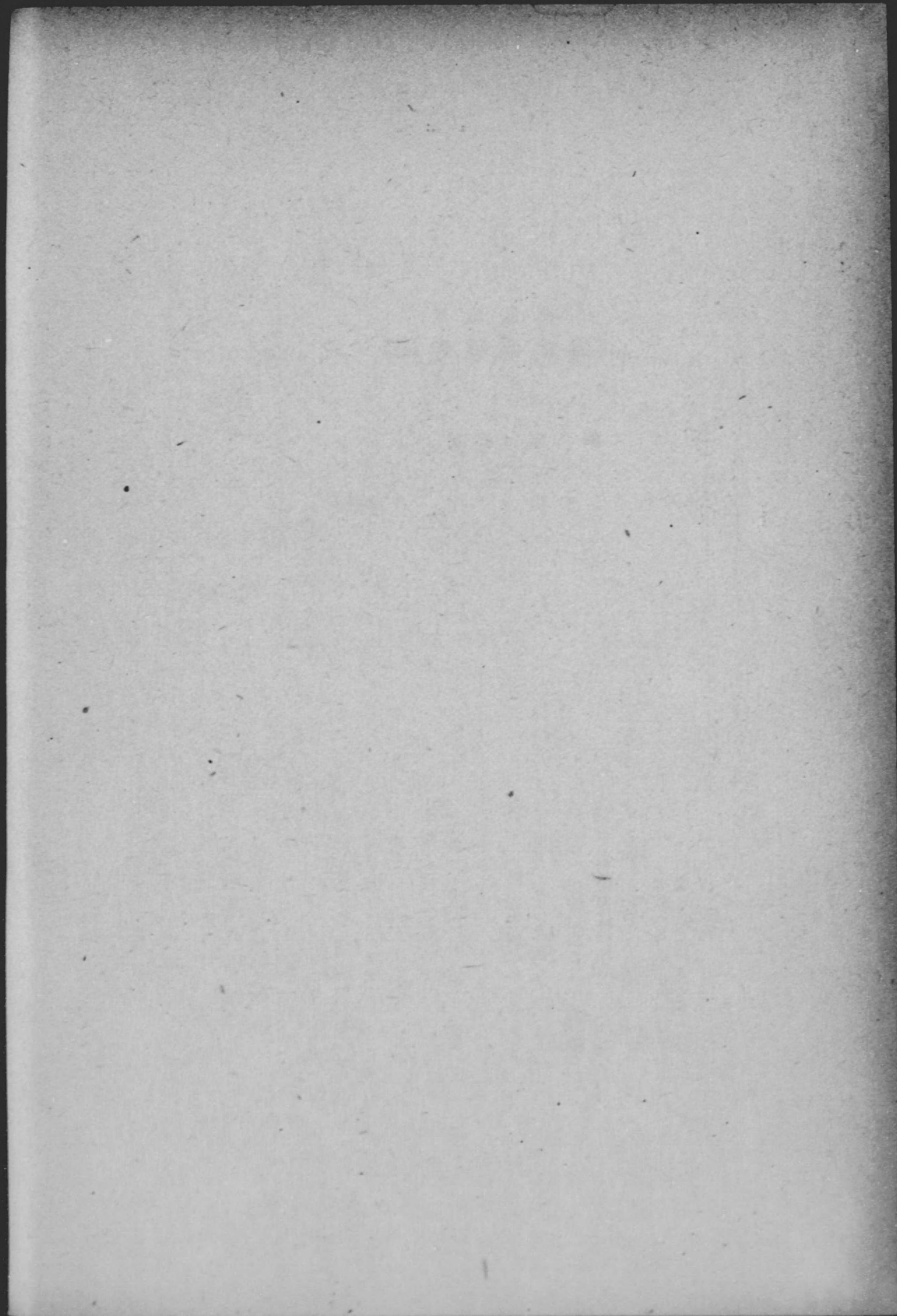
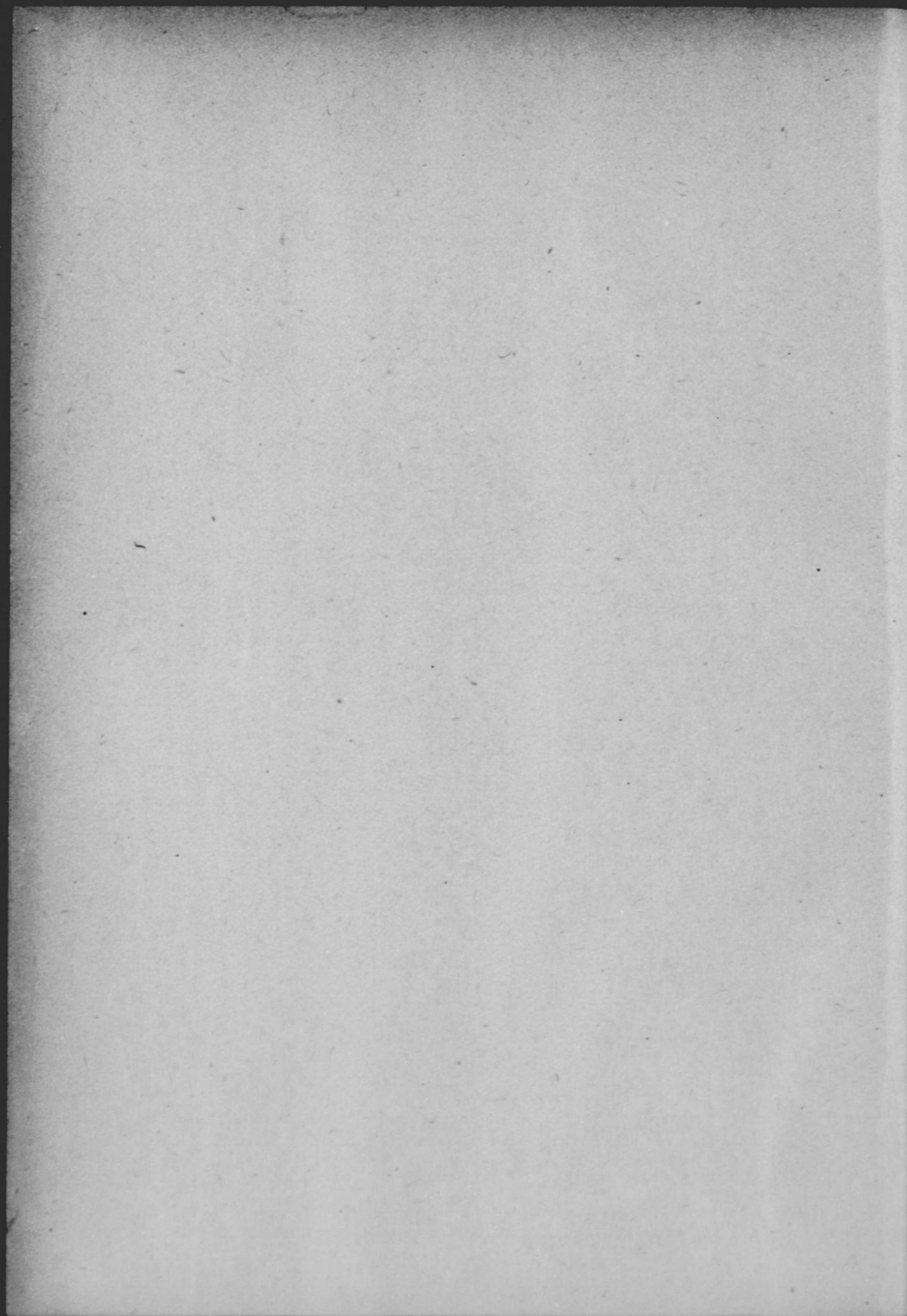
【定價 金貳圓八拾錢】

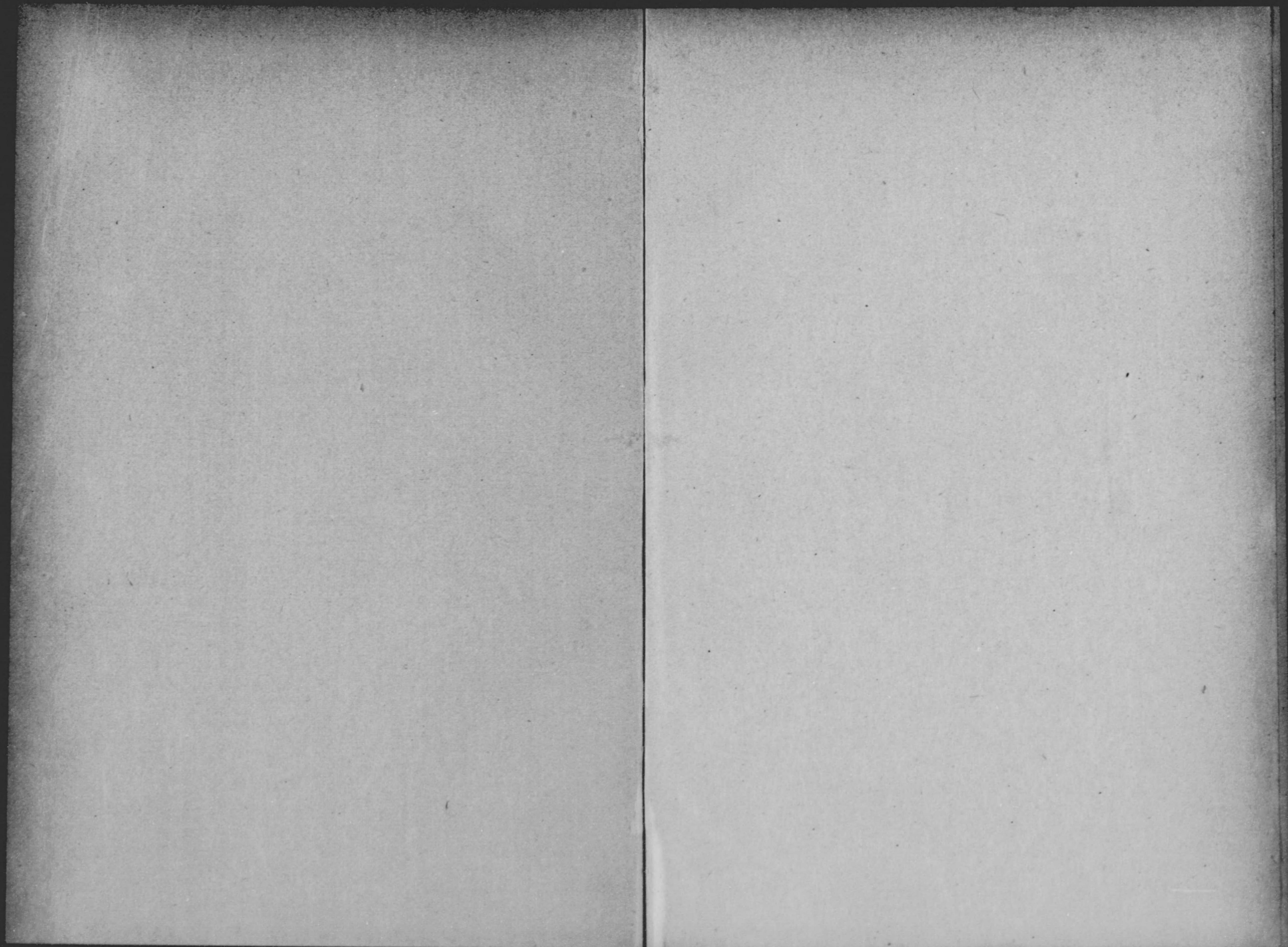
國民學校 儀式行事精義

著作  
 所有

編者 東京市神田區神保町一ノ三七 國民學校實踐研究會  
 發行者 東京市神田區須田町二ノ二一 草間末三  
 印刷者 東京市神田區神保町一ノ三七 澤田正男

發行所 東京市神田區神保町一ノ三七 八光社  
 發賣所 東京市神田區神保町一ノ三九 栗田書店  
 電話東京四二八一〇番  
 電話神田二一六一番







272  
184

